

中国60年代と世界

第2期第13号(通巻第19号) 2019.2.27

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1) コメント…波多野真矢(1) 秋山珠子(2) / 土屋昌明(2) / 2月例会予稿: 廖亦武のインタビューをまとめた『子彈鴉片』に関する討議…(6) / 廖亦武『銃弾とアヘン』が投げかけるもの…鳥本まさき(7) / 研究ノート: 紅衛兵の立場と罪責の問題…土屋昌明(9) / 史料復刻: 人民日報64年8月28日社説…解題・前田年昭(14) / 秋雨教会弾圧事件をめぐる…土屋昌明(18) / 『格拉古軼事』作者・張先痴氏への敬意をこめて(19) / 胡傑『私が死んでも』字幕(最終回)…土屋昌明編訳(20) / 歳出し批評: 日本における東洋史学の伝統(上)…旗田巍、解題・前田年昭(24)

例会報告(12月27日)

中国研究の現状に一石を投じる“亡命文化論”の提起

例会は12月27日(木)19時から行われ、「中国亡命文化論の試み」として土屋昌明が報告した。前号に掲載された報告予稿は約5,000字だったが、当日配布された報告文書は12,000字を超えるものだった。以下、同文書によりつつ当日の報告概要を紹介する。まず冒頭で、現在の日本の中国研究が見落としている、中国人亡命者による創作・批評に目を向けることは、従来の中国研究を乗り越える可能性がある、と課題が設定される。続いて報告は四つのパラグラフにそって進められた。

【亡命文化に関する研究】何故に中国研究で、亡命者が取り上げられないのか、三つの理由を挙げる。第一に、中国研究が伝統的にネーションにとらわれる傾向があり、大国化によってその傾向が強まっている。第二に、孫文など帰国して大成した亡命者を中心に考察してきた。第三に、亡命することで国内にいたときのテンションが失われたと見なされる傾向がある。問題は、亡命者を本体から離れた者、周辺者とのみ考え周辺者が持つ特性を見落としていると言えるのではないかという。

【中国人亡命作家の特性】屈原の風格が浸透している眼代中国の知識人には、正義を貫いて罪を負ったとき、屈原と同じく自殺か、下獄か、亡命か、三つの選択肢があるとする。また天安門事件後の亡命者取材した翰光監督の映画『亡命』には、三つの亡命タイプが見られるという。亡命先の文化によって全面的に自己を変える、空間的な移動だけ受け入れて自己を維持する、複数の文化を融合し新しい文化を創造する、である。こうして文学創作における言語と思想の問題に踏み入った報告者は、例会の場では省略されたが、配付文書では、直接取材などに

よった、タイプの異なる5人の亡命作家の経歴を詳しく紹介している。

【中国亡命者の機能】劉曉波死亡報告の記者会見の様相を紹介し、インターネットによって増幅される亡命者の「目」が、国際社会の中国への関心を強めるためのリード役を果たしているとする。

【亡命の思想的アナロジー】サイードの『オリエンタリズム』などを援用しながら、亡命から学べる思想は、文化研究としての精神の亡命にあると思われる。亡命生活の不自由が、国家への忠誠の圧力に変わりうることから如何に相対的に自立できるか、それを如何に表象するかを模索することが亡命者にとっての基本問題であり、私たちが共有すべき立場ではないかと問う。



報告に時間が割かれたこともあって、報告後の論議は必ずしも活潑とは言えなかった。これは、報告者が「文学大国である中国の亡命者の著述活動に対して、日本の読者・研究者は冷淡な態度を持していると言わざるをえない」というところの「態度」が、無意識であったにしても、私をはじめとする参加者にも内在していたからかもしれない。大きな課題を与えられたと思わずにはいられない。経済的、政治的、軍事的強国となった中国への対抗策を論じることが現代中国研究の要諦であるかのような現状に一石を投じる報告であった。(文責・編集部H.A.)

示唆に富む文化の“境界の鏡”との指摘

波多野真矢

天安門事件から30年、中国の亡命文化、亡命文

学の問題が日本ではまともに論じられていないということに心が落ち着かない。亡命者の文学に焦点を当て、特性の分析、創作の言語と思想の問題、機能(影響)や事象としての捉え直しの提起など、大変示唆に富む試論であった。その多くが屈原的風格=愛国・憂国の中国文学・文人氣質の政治性を持つが、高行健は異質であるが故に文学者以上に芸術家なのかもしれない。自文化・異文化の境界の鏡、との指摘に、王国維や、戴思傑や楊逸ら亡命者ではない作家群などについても再考の視点となると感じた。

複数形としての「亡命文化論」

秋山珠子

2014 年 10 月、中国のインディペンデント映画を取り巻く情勢が厳しさを増し、海外へ拠点を移す監督の存在が目立つようになった頃、私はミシガン大学中国学研究センターで「Three Songs of "Exile": Independent Chinese Filmmakers Far From Home」という 4 日間に渡るイベントを共同企画し、崔子恩、王我、応亮の 3 監督を招聘し、映画上映とシンポジウムを行ったⁱ。イベントのタイトルは、香港の女性監督、アン・ホイによる、国境の狭間に揺れる母娘を描いた半自伝的作品『客途秋恨』(1990)の英題「Song of Exile」から想を得ている。Exile に引用符を付したのは、彼らが狭義の政治亡命者ではないという理由のほか(招聘した 3 監督も、応亮を除く二人は、中国と米国を行き来していた)、90 年代より中国知識人の間で語られるようになった inner exile (内的亡命) というテーマや、中国伝統社会における隠逸の系譜と対照させて見ることができるのではないかという意図からであり、songs という複数形を用いたのは、個々の人間とその境遇の差異に目を向けることを企図してのことであった。果たして、開口一番、監督たちが表明したのは、「Exile」という単語で一括されることへの違和感であり、シ

ンポジウムでは各人の異なる経験、渴望、失意、省察が驚くべき率直さで語られることとなった。

今回の土屋報告で強く印象付けられたのも、「亡命」という様態の圧倒的な多様性であった。翰光、張伯笠、高行健、鄭義、張伯笠、Jimbut (ジンバッド)、万之、廖亦武、庄曉斌…。出国の経緯、出国後の執筆言語、創作内容、社会的認知ともに大きく異なるこれらの人々の状況は、「国を離れた人々は、一人として exile を等しく、均質化した形で経験することはない」(“Introduction. Framing Exile: From Homeland to Homepage” in Naficy, ed. Home, Exile, Homeland, 4) という、亡命研究の先駆者、ナフィシの言葉を想起させる。

また、今回の報告で紹介された事例の多くは、1989 年の天安門事件を契機に国を離れ、そのまま国外にとどまっている人々であったが、今や、その後帰国し、中国に活動の場を移す人も少なくなく、先述の事例も含め、グローバル化に伴って新たな形態の出国者も増加している。今後「中国亡命文化論」を深化させる上で、個々の事例の多様性を見据えつつ、こうした時代の変遷と、「亡命者」の相貌の変容、国境の持つ意味変化などが考慮されることが大いに期待される。さらに個人的に関心を抱いたのは、今回取り上げられた極めて興味深い「亡命者」たちのほぼ全てが男性であったが、彼らがその独自の創作行為を行うにあたって、社会とのインターフェース、あるいはアーレント言うところの「オイコス」を多分に担っているであろう側—主に女性—の視点からは「亡命者」像はどのように映じるのだろうか、という問題であった。それは、「亡命文化論」にさらなる陰影を加えるのみならず、公的領域と私的領域をどのように切り結び、生きていくかという、今日の私たちが均しく直面する問題に、鮮烈で意義深い事例を提供するのではないかとと思われるのである。

ⁱ このイベントの筆者による報告は、以下の URL で読める。
<http://www.repre.org/repre/vol129/topics/6/>

発表を終えて 亡命文化論補遺

土屋昌明

2018 年 12 月の例会では、中国の亡命文化を考え

る端緒を得ようと試みた。参考になる亡命文化に関

する研究として、ロシア革命以後のいわゆるロシア人のドイツへの亡命とベルリンでの文化活動をまとめた諫早勇一『ロシア人たちのベルリン』（東洋書店、2014年）がある。この研究では、亡命のプロセス・ベルリンでのロシア人たちの亡命生活・ベルリンでの文化活動（出版・演劇・文学・美術・映画・音楽・思想）・ナチスとの関係などが扱われている。ロシア人亡命者という対象を、ロシア革命から1920年代という時間とドイツ（ベルリン）という空間から理解しようとする。彼らは「ロシア」という文化的アイデンティティの強固さが亡命文化の背骨になっている。その点は中国人にも通じるのであり、このような視点は参考に値する。

亡命文学には、司馬遷の発憤著書的な創作の動機付けがある点で、通常とは創作環境が違う。通常、亡命作家は、強権的な政権によって、創作の自由が制限されたり身の安全が脅かされたりして、亡命を余儀なくされた。したがって、権力に対する闘争の意志を強く持っているものであり、それだけに亡命は喪失感をもたらす。それが作品に投影されるのは当然である。次に、アイデンティティの危機をいかにして乗り越えるか、そのあがきが創作に反映する。スペイン語文学のように、こうした動機が文学の基調となっている分野もあり、寺尾隆吉は次のように述べている。「スペイン語圏のあらゆる文学ジャンルに権力への抵抗と亡命の長い伝統が息づいている。幸か不幸か、この悲劇的伝統に支えられた文学は今日まで優れた作品を生み出し続けて」いる（『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』洛北出版、2013年、14頁）。

亡命者作家では、亡命による創作環境の変化は、文学創作の言語と思想の問題をもたらす。中国人亡命者で言えば、第二言語で中国のことを書くのか、中国語で中国のことを書くのか、第二言語で中国のことを相対化しつつ書くのか、ということである（創作の側面だけではなく、読者の問題も考慮すべきである）。以下、例をあげておこう。

第二言語で書いている作家として、Jimbut（ジンバッド）がいる（以下、庄曉斌以外は『AESTEION』87所収、ジンバッド「異郷ヨーロッパの文学者たち」を参照）。Jimbutは、1965年生まれ、本名は馮征修、80年代に上海の大学（上海師範大学？）で地下文学グルー

プに参加、詩と長編小説『常常低着頭』を書いた。

1987年7月7日、詩作のために家宅捜査を受け、拘留。釈放後、同9月に雲南省シーサンバンナへ逃走、タイ族の南伝仏教に触れて沙弥となる。

1988年夏、福建省莆田の広化寺に住持、警察から抑圧され、中国脱出を決意。

1989年4月、シーサンバンナからミャンマーへ歩いて脱出、タイに移動。ミャンマーを通り抜ける際に、ビルマ共産党の地域とビルマ政府軍の地域それぞれで拘留されたが、沙弥だったので解放された。5月以降、タイの中国系大乘仏教の寺で暮らし、6月4日にタイの中国語新聞で天安門事件の発生を知る。上海師範大学の学生リーダーとして捜査対象となる（運動に参加していないのに）。

1990年10月、ラオスの警察からヴィエンチャンの戸籍とラオスのパスポートを購入。11月にラオスに入国、ラオス警察に逮捕、ヴィエンチャンの監獄に1年4ヶ月入れられる。

1992年3月12日、アムネスティ・インターナショナルと国際ペンクラブの呼びかけで、国連難民高等弁務官事務所が動いて釈放され、デンマークへ出国、デンマークに定住。

1996年、デンマーク語、英語、ドイツ語、フランス語などの試験に合格、南デンマーク大学（Odense University）に入学、哲学を専攻。1997年、初めてデンマーク語の作品『Tiden er til Fest』を創作。

1999年、『Tiden er til Fest』が出版。翌年、英訳本が出版。哲学学士を取得。

2002年、哲学準博士（修士より上）取得、キルケゴールとヘーゲルの比較。以後、キルケゴールの翻訳に従事。

2003年、『Tiden er til Fest』にスウェーデンのペンクラブからTucholskypriisetが授与。

2007年、詩集『Atleve i enfortælling（物語の中に生きて）』出版、好評を得る。

2008年、戯曲の創作を学ぶ。

2010年、初上演。

2011年、詩集『Ukendt（見ず知らず）』出版。デンマーク国家芸術基金特別図書賞。

2014年、戯曲『Box'en』上演、コペンハーゲン

の地下鉄建設工事現場の外国人労働者と北京の地下鉄建設工事現場の出稼ぎ農民の生活を描く。

2015 年、戯曲『Ligger godt i maven』上演、デンマークの華人「春巻き大王」の物語。

2016 年、戯曲『Købers Paradis』フォックスコンの労働者の状況に関する戯曲。

デンマークに亡命してからすぐに現地語での創作を選択している。現地語で書いてはいるが、テーマは中国人のことを扱っている。

中国語にこだわっている作家として万之がいる。万之は 1952 年、本名は陳邁平、江蘇常熟うまれ。1978 年に首都師範大学に入学、1982 年に北京中央戯劇学院研究科に入学、1985 年に修士。70 年代から『今天』に小説を発表。

1986 年、オスロー大学に留学。

1989 年、天安門事件のあと、北島ら『今天』の人々の亡命を手伝う。

1990 年、『今天文学雑誌』がノルウェーで復刊、編集メンバーとなる。スウェーデンに移住、ストックホルム大学で中国語教員となる。

妻はスウェーデンの中国研究者で翻訳者。本人もスウェーデン語を使うが、創作は中国語を使い、母語での創作の重要性を強調している。独立中文ペンクラブの秘書長をしたこともあり、そのウェブ・マガジン『自由創作』で作品を発表した。

2004 年、万之の名で短編集『十三歳のサッカー』を天津百花文芸出版から出版。

2009 年、散文集『凱旋曲—ノーベル文学賞物語』香港オックスフォード大学出版（2010 年に『諾貝爾文学獎傳奇』上海人民出版社）。

2015 年、スウェーデンアカデミー翻訳賞。

さて、中国語で書くのが、選択によるのではなく、語学能力の問題による場合もある。つまり、中国語以外が使えなければ、中国語で書くしかない。そうになると、翻訳者を見つけて、協力関係を築いて翻訳を進めることになる。廖亦武はそのような例である。彼は 1958 年 8 月 4 日、四川省塩亭うまれ、1980 年代に四川省涪陵地区芸術館の創作員、民間詩刊で自作の詩を発表していた。彼が六四天安門事件にこだわり続けているのには、以下のような原因がある。1989 年、カナダの中国研究者マイケル・デイ（戴

邁河）が、地下詩歌のことを教えてもらうために劉曉波の紹介で成都に来て廖亦武の家に泊まった。マイケルは短波ラジオを持っていて、廖亦武は天安門の状況を聞いた。事件の前後に彼は大虐殺が発生することを予感し、「大虐殺」という詩を書き、その晩に朗読したという。二人はこれを録音し、ダビングして頒布した。1990 年、天安門事件にちなんで映画『安魂』を制作したが、撮影チームのスタッフ全員が逮捕され、彼は反革命宣伝罪で懲役 4 年。

1994 年に出獄、社会の低層や反抗している人々にインタビューを始めた。

1999 年に『沈淪の聖殿——中国二十世紀七十年代地下詩歌遺照』（地下刊行物『今天』など 70 年代の地下文学の紹介）、『漂白——辺縁人採訪録』（民間の印刷所が政府系出版社から出版権を買って発行する第二ルートで出版）。

2001 年から「老威」というペンネームを使う。『中国低層訪談録』（60 人へのインタビュー）を出版したが、本は発禁、出版社は処分、本を紹介した『南方週末』の編集者は免職となった。

2002 年、『中国低層訪談録』を誰かが台湾に持ち込んで完全本が出版。

2008 年、『中国低層訪談録』のアメリカ版 The Corpse Walker : Real Life Stories : China from the Bottom Up が出版。

2009 年、同上のドイツ語版。フランクフルト・ブックフェア参加予定だったが、出国申請が拒絶。

2010 年、ケルン文学祭に参加の際、機内に乗り込んだところで拘留された（本人の談による）。9 月にベルリン国際文学祭には参加（メルケル首相の支持があったとされる）。その後は出国を禁止された。

2011 年 7 月 2 日に中越国境を徒歩で越え、5 日にハノイから飛行機でドイツに向かった。ドイツは彼の政治亡命を認め、ベルリンに定住。『子彈鴉片 [銃弾とアヘン] ——天安門大虐殺の生と死の物語』を出版。ドイツで中国の全体主義体制を批判し続けている。

2012 年、DAAD アーティストプログラムで奨学金。ドイツ出版協会平和賞。

2013 年 9 月、駐ドイツフランス大使からフランス芸術文化勲章。

2016 年、『毛沢東時代の愛情』を出版。

2018 年、米国のヴァーツラフ・ハヴェル図書館基金会から Disturbing the Peace, Award for a Courageous Writer at Risk (心をかき乱す平和——迫害を恐れぬ勇敢な作家賞、打擾和平——不畏迫害作家獎) を受賞。劉曉波氏の未亡人である劉霞さんの国外脱出を積極的に支援。9 月、劉霞さんと共にニューヨークにおける授賞式とシンポに参加。

ドイツ亡命後は、フィッシャー社の契約作家となり、中国語で書き翻訳者がドイツ語に翻訳するパターンをとる。以下にドイツ語版の目録を示す。

① Fräulein Hallo und der Bauernkaiser: Chinas Gesellschaft von unten. Aus dem Chinesischen von Hans Peter Hoffmann und Brigitte Höhenrieder. Mit einem Vorwort von Philipp Gourevitch, einer Einführung von Wen Huang und einem Nachwort von Detlev Claussen. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2009

② Fräulein Hallo und der Bauernkaiser: Chinas Gesellschaft von unten. Schriftenreihe der Bundeszentrale für politische Bildung. Bonn 2010.

③ Für ein Lied und hundert Lieder: Ein Zeugenbericht aus chinesischen Gefängnissen. Hans Peter Hoffmann, Übersetzung. S. Fischer, Frankfurt am Main 2011.

④ Massaker: Frühe Gedichte. Aus dem Chinesischen von Hans Peter Hoffmann. hochroth Verlag, Berlin 2012.

⑤ Die Kugel und das Opium. Leben und Tod am Platz des Himmlischen Friedens. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2012.

⑥ Erinnerung, bleib. Texte, Musik, Film. Lieblingsbuch/Fly Fast Publishing, Berlin 2012.

⑦ Die Dongdong-Tänzerin und der Sichuan-Koch: Geschichten aus der chinesischen Wirklichkeit. Aus dem Chinesischen von Hans Peter Hoffmann. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2013.

⑧ Gott ist rot: Geschichten aus dem Untergrund – Verfolgte Christen in China, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2014.

⑨ Die Wiedergeburt der Ameisen. Roman. Aus dem Chinesischen von Karin Betz. Nachwort und Glossar

von Karin Betz. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2016.

次に、亡命先で不遇となり、翻訳者とも出会わないという作家を紹介しよう。庄曉斌には自伝的長編小説『赤裸人生』がある(庄曉斌『赤裸人生』カナダ・ケベック・中文国際出版社、2010 年)。私は 2010 年にパリで本人にインタビューし、出来したばかりの『赤裸人生』完全版をもらった。この作品は、60 年代初頭、自分のもとに武器を引き入れるために台湾に手紙を出した者が主人公である。これが原因で主人公は反革命とされて死刑になるが、その弟は逃亡し、その過程で遊民の助けを得、最後に国外亡命する。この弟は作者の分身で、庄曉斌は実際に兄を死刑で失い、自分も懲役 16 年となり、獄中でこの小説を書いたという。つまり、前半は兄と自分の境遇を重ね合わせた自伝的な内容、後半は獄中で各種の懲役囚から聞いた話が素材となっている。60 年代にも武装闘争を考えた者や、警察や行政の統制から離れた地下的な遊民が存在したことがわかる。私はパリからの帰国途上、機内で読み始めたら、あまりのおもしろさに睡眠を忘れ、11 時間読みふけた。残念ながら 600 頁以上ある長編なので、11 時間では読み終えないうちに羽田に到着した。

彼へのインタビューで次のような話を聞いた。獄中では特殊な記号を編み出して小説を書き、メモが見つかっても外国語の学習と称して懲罰を避けた。その後、文革終了後、管理が緩くなり、紙に書き付けられるようになった。80 年代のある日、獄中で書いていた小説を没収されたが、刑務所長が文学好きで、彼の小説を読んで感心し、刑期を短縮して出獄させてくれた。ある出版社と契約して、印刷したところでその出版社が夜逃げし、訴訟して勝ったが、感謝料を現金で支払えず、印刷した本を全部現物支給された。しかたないので北京に持ち込み、歩道橋の下でみずから販売した。すると、口コミで非常によく売れた。ある夜、売上金を泥棒に盗られ、地団駄を踏んだが、数日して戻された。見ると、売上金に詫び状が添えられていた。詫び状によれば、お金を盗ったあとにこの小説を読んで、この人のお金を盗ったら申し訳ないと思って戻したとのこと。口コミの評判で、ある雑誌社の編集長に招かれた。後に

内蒙古人民出版社から出版できたが、検閲のために相当部分を削除した。老齢を迎え、本書の完全版を出版するためには国外に出るしかないと、2008 年に夫婦でパリに渡り、そのまま亡命した。しかしフランスで中国語の出版社が見つからず、けっきょくカナダの出版社から完全版を出版した。年を取り、言葉もできず、友人も少ないため、中華料理屋の皿洗いで糊口をしのいでいるとのこと。

最後に、第二言語で中国のことを相対化しつつ書く亡命作家に、ジュリー・オーヤンがいる。ジュリー・オーヤンは 1968 年、本名は欧陽竹立、雲南生まれ、

1986 年にアモイ大学歴史考古学科に入学。天安門事件で家宅捜査を受けた。

1990 年、ロンドンに留学、歴史と社会人類学を専攻。

1991 年、ライデン大学で日本語日本文化を専攻、長崎に留学、1996 年に修士。

1995 年、オランダの作家養成講座で学ぶ。

2001 年、小説『Vliegers boven Lentestad (昆明の空に浮かぶ風)』を出版。

〔(28)ページにつづく〕

2月例会（2019年2月27日）報告予稿

廖亦武のインタビューをまとめた『子弹鴉片』に関する討議

及川淳子・土屋昌明・鳥本まさき

2月例会では、1989年6月4日当時何らかのかたちで天安門事件に関わり、逮捕・懲役となった人々に対する廖亦武のインタビューをまとめた『子弹鴉片』に関する座談会をおこないたい。現在、本年の天安門事件30周年記念のために本書の翻訳を進めている及川・土屋・鳥本が、それぞれに本書の特長や背景について見解を述べるかたちをとって進める。以下がそれぞれの観点となる。

及川淳子：廖亦武は、自らの言葉で歴史を刻むべく、艱苦奮闘する人だ。『子弹鴉片』は、六四天安門事件をめぐるオーラルヒストリーだが、劉曉波の最期についても詳細に記述している。例会では、廖亦武の言葉を通して、彼らの生と死に向き合うことの意味を考えたい。

土屋昌明：歴史のおもてに現われた人々ではなく、権力に翻弄されて沈湎した人々に眼を向けることの重要性を考えてみたい。それがインタビューという形式や背景となる事情の説明をしないという態度になるのだと思う。また、本書のキーワードである「鴉片」は、90年代の「向錢看」（金儲けのイデオロギー化）を指しており、それがどのように表現されているか指摘したい。つまり、政治の理想の追求から

生活の理想の追求への転換、その反作用として、正義や人助けのための無償の行為をよしとする「江湖」の精神の喪失がある。単に個人の人生が天安門事件でどのように破壊されたかだけでなく、精神的な破壊を描いていると思う。

鳥本まさき：89年の民主化運動時、学生の主張にシンパシーを抱き、陰に陽に支援した無数の市井の「国を愛する」人々が存在していた。同書はこれまで光が当てられていなかったこの無数の人々の中でも、重罰を受けた人々へのインタビューを主としている。この背景には、職場で訓告を受けたり、しばらく職を干されたりした、より多数の存在がある。その差別的、恣意的処遇により、深刻な社会的な問題があぶり出され、また、巧妙に意図された忘却があったのかもしれない、とも想像されてくる。いわば「運が悪かった」人を故意につくり出すことにより、「逆らえばこうなる」との「見せしめ」あるいは「生贄」とされたように思えてくる。こうした構造は中国の現代史において、何度も繰り返されたばかりでなく、全体主義的な体制における普遍的な現象として、どの国でも起こり得ることと言えるかもしれない。

☆

廖亦武『銃弾とアヘン』が投げかけるもの 翻訳のための覚え書き

鳥本まさき

廖亦武氏のこの著作の翻訳はなかなかしんどい。監獄、拘置所、労働改造のオンパレードである。「愛国」の「激情」に駆られ、運動に参加し、逮捕され、過酷にかつ「無駄に」獄内で費やされた時間、出所した後の社会の変化への戸惑い、人心への不信、自分が賭けたあれは何だったのかという問い… 根底のところでは揺さぶられ、異郷に住む自分に重ねて読んでいるらしいことに気づいて愕然とする。まるで周囲の風景まで異なって見えるほどで、陰鬱である…。

たとえば日本にいる私が、自分は不遇だと嘆くでしょう。しかし、今の日本は中国のような政治体制ではなく、体制批判をして投獄されるということはほとんどない。だから逆に、嘆くべき「不遇」があったとしても、単なるルサンチマンだと罵られ、自己責任とされるような気がする。あるいは戦時中だとしよう。内心で反戦を唱え、政府や周囲に協力しなかったらどうなったであろう。特高に呼ばれ、投獄されたかもしれない（それにより失われる時間、失われる様々な人、もの、ことについて、私たちは書物・映画などで知ることができる）。もしその戦時体制が続いていたら、あるいは永遠に続くものであるとしたら、じっさい自己責任といえるであろう。そのようなことであれば、たとえおかしいと思っても、諦めて唯々諾々と悪政に従うよりほかあるまい。悪政に逆らって罰を受けるのは馬鹿なことと言われるのかもしれない。

世の中の大半がある方向になびいているとき、それがどうもおかしいと考えて抗う。ひどい場合には捕らえられる。政治犯の多くはそうして生まれる。自己責任と言うなら、そうとも言える。日本のあの戦争が終わったとき、戦時中に辛酸をなめた彼らに対する見方は、一気に変わっただろう。

廖亦武『銃弾とアヘン』の取材対象も、多くは「政治犯」と言えるであろう。ある理想を信じて、正しいと思い、行動に移した。その後「自己責任」だとされ、「損」をした、と見なされている。同情され

たととしても、あいつは「運が悪かった」のだ、かわいそうに、と。定義的に言えば政治犯とは、時代や場所によっては犯罪者ではなくなる人たちである。30年、主観的に中国と関わる身の私にとって、この事件はずっと脳裏から離れない。主観的に、というのは、日本に住んでいて、別に、中国のことを考えなければいけない義理はおそらくないのに、私はそれにこだわっている、という意味だ。

廖氏は、境遇を同じくする無数の一般庶民、「暴徒」あるいは「政治犯」たちのうち、取材を受けてくれたごく少数の「代表」に「ポイントを逃さない」という意味で丹念に取材している。「暴徒」は中国の政府側の呼び名だ。廖氏は彼らを、自身と同じ「政治犯」として名誉回復されるべき人たちと信じ、その立場から取材を進める。だからであろう、取材対象から多くの共通点が浮き彫りにされる。だが同時に、廖氏の文学者としての筆致は、取材対象を「低いところから（「底層」から）」等身大の人間としてディテイルを書き込み、私たちの目の前に彼らが生身で立ち現れてくる感がある。また、人が「罪」に定められるどうしようもない偶然性をも含み入れつつ、釈放後もその「冤罪性」の確信を支える強靱さの秘訣を探究している感がある。強靱さや持続性の拠って来たるところは「冤罪仲間」いわば「獄友」との連帯もあろうし、また、捕らえられた多くの男性にとって、異性（母親や恋人）からの支えが大きいかもしれない。

当時、あの運動に関わった多くの学生たちは、その後の右肩上がりの社会の中、おそらく徐々に節を曲げ、何事もなかったかのように進む時間の中に身を委ね、「成功」していったであろう。しかし「暴徒」とされた前科者たちにはその「成功」に浴する切符さえ与えられなかった。そしてそのことが、彼らの「敗者」としての視角や、思想とさえ言いうる独特な視点を形成したのかもしれない。

読み進めていくうちに「銃弾とアヘン」というタ

イトルの意味が分かってくる。研究会のある討論で、私も気づいた。まだ日本と中国の経済格差が歴然としていたころ、私たちはおそらく中国の民主化は時間の問題だ、と漠然と考えていた。そして、経済発展、中国の崛起。経済発展というと聞こえがいいが、実は物質的欲望と拝金が何かを忘れさせてしまっていたのではないか。ある「幻想」(イデオロギーのスローガンにとどまらない。「春節」の帰省や団欒のような多分に集団無意識的なもの。最近の例えば「中国の夢」は無意識的なものにも訴えかけており、注意が必要だと思う)におぼれさせ、麻痺させていたのではないか。そんな強烈なメッセージがこの本からは響いてくる。

このようなことを考える際、私がよく参照とするのが、『新約聖書』マタイ伝(4:4)およびルカ伝(4:4)の、イエスが荒野で悪魔からの誘惑に答えた有名な言葉「パンのみに生きるにあらず」(マタイ伝ではさらに「神の言葉で生きる」と続く)である。また、さらに、この荒野の誘惑を核に文学的創作を加え、深い思索を行った、ドストエフスキイの筆による『カラマーゾフの兄弟』の登場人物イワンが弟アリョーシャに語る「大審問官」の叙事詩である。とはいえ、この作中叙事詩の解釈は難解で、ここに私の見解を述べる余裕も準備もない。付け加えると、周知のように、ドストエフスキイ自身も政治犯として死刑を宣告され、執行の直前の極限状況を味わい(死刑の宣告は芝居じみた「皇帝の恩赦」によるフェイクだった!)、シベリア送りとなり、その経験を小説『死の家の記録』にまとめ、ペテルブルグに帰京後、5つの大作を世に問うている。

廖氏のこの著書は、キリスト教用語でいうなら否定神学的とも言えるかもしれない。中国の「政治犯」の現在を徹底的なリアルな筆致で描きつつ(おそらく少なからぬ脚色が加えられているであろうが)、彼らがおかれた絶望的状况と「幻想」を追い求め続ける社会のどこに出口があるのかを必死で探し求めている感がある。その答えはこの著作の中から浮かび上がるだろうか? いまだ「銃弾とアヘン」の深い闇の中にあり、おそらくもはや中国一国では解き得ない問題となっているのではなかろうか。

このような問題意識は廖氏一人のものではないよ

うだ。同じく海外在住のアーティスト艾未未氏がカナダ・トロントのガーディナー博物館で2月28日から6月9日に行われる個展「Ai Weiwei: Unbroken」に合わせ1月30日に発表した、ファーウェイの孟晩舟 CFO の逮捕後のカナダ人に対する拘束を受けた声明の一部を、『美術手帖』ウェブサイト『『本当の問題は西欧諸国にある』アイ・ウェイウェイが中国とカナダの政治的対立について声明を発表』(<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/19260>) から引用・紹介しておきたい。私はこれをまったくの「不都合な真実」として困惑しつつ、今後考えていきたい課題だととらえている(いや、うすうす感じていたのではなかろうか……)。

「西欧諸国は中国の労働問題や環境被害、汚職といった基本的権利の搾取を通じて、大きな恩恵を受けています。」「西欧諸国は中国の問題に気づかないふりをし、むしろ狡猾に喜びながらパートナーシップを結んでいます。彼らは中国の台頭の背後に隠れる力なのです。そして中国はさらにいっそう強力な国になり、その権威主義的傾向を保ち続けています。」「西欧諸国でしばしば繰り返される議論は、“抑圧的な国々に力強い経済成長がもたらされた場合、人権や民主主義の受け入れも必然的にもたらされるのではないか”ということです。しかし、独裁政権の歴史を理解すれば、この説に可能性がないことは自明です。」…

天安門事件、あるいは六四。これも名誉回復されるべきだろう。だが、前途多難である。政治的にはまず難しい、と言わざるを得ない。韓国などの例を見ても、まず第一歩として、一つのメルクマールとなるのは、天安門事件あるいは六四を題材とした劇映画が作られることであろう。すでに婁燁監督の『天安門、恋人たち』(原題:頤和園)が2006年に作られているが、中国大陸では上映されていない。まずはドキュメンタリーからであろう。だが、廖氏のようなインタビューを行うのは政治的に敏感すぎる。廖氏は政治的亡命の代価を支払ったと言ってよい。それでも今後、この問題を避けては通れないと考えてよいだろう、と思う。やがていつの日か、廖氏のこの本を原作とした劇映画が作られることを願っている。 ☆

研究ノート

紅衛兵の立場と罪責の問題 前田氏の主張を承けて

土屋昌明

いわゆる紅衛兵の立場と罪責の関係は、21 世紀に入ってやっと取り上げられるようになった。例えば余聞偉編『懺悔還是不懺悔』（中国工人出版社、2004 年）は、現代人にとって「懺悔」はどのように必要か、という理論的な方向性を持ちながら、文革時期の事件に対する回想や懺悔について多くの評論を載せる。前稿（本誌第二期 12 号「胡傑『私が死んでも』と文革の謝罪の問題」）で紹介したように、この 10 数年来、宋彬彬らも「紅衛兵」が過去の反省を文章として発表し、胡傑監督がドキュメンタリー『私が死んでも』で、彼女らが関わった過去の事件を作品化し、宋彬彬らが公開して謝罪する、といった動向が生じ、紅衛兵の罪責の問題をめぐって、加害者と被害者のあいだでやりとりがおり、中国のネット世論で多くの異なる意見がかわされた。なかには、宋彬彬らの謝罪行為への批判を通して世論を盛り上げ、中国共産党による 1981 年の文革否定の決議を否定し、文革に対する積極的評価をおしひろげようとしたと思われるような意見もある。つまり、彼女たちの謝罪とそれへの批判の応酬は、いわゆる文化大革命（文革）における派閥的な闘争の延長だとも考えられるのである¹。ここで、文革の派閥とは、紅衛兵の立場の問題であり、それが罪責の問題と絡んでいることがみてとれる。

そこで本稿では、前稿では言及できなかった紅衛兵の立場の問題と、宋彬彬の反省について考えておきたい。幸い、前田年昭氏が紅衛兵の立場の問題について議論しているので（本誌第二期 12 号「思想史研究の前提、立場を明らかにすること」）、これを承けて述べたい。

1、「文革」の含意

前田氏は前稿で、第 6 回例会（2016 年 1 月 28 日）の次のような討議記録をとりあげた。

〔前略〕前田は、松本が『イングランド労働者階

級の形成』を引用して述べた、歴史からどう学ぶかという点について共感すると述べ、文革が序列を問い直す場であり、ひっくり返す実験の場だったのではないかと指摘した。文革における具体例として、半工半読をめぐる紅衛兵内部の路線対立を挙げた。／これに対して、土屋が、前田の発言こそ文革はこうだという決めつけであり、序列をつける考えではないかと批判し、紅五類・黒五類の序列をつくったのは文革だったと指摘した。／前田が反批判に立ち、文革の象徴として紅五類・黒五類を挙げる「定説」とは反対に、紅五類・黒五類こそが文革で問い直されたとの見方が必要と述べた。〔後略〕〔会報第 1 期第 7 号参照〕

これについて前田氏は、次のように問題設定している。「考察の拠り所としたいのは、大衆的な社会運動としての文化大革命は、はたして出身血統主義に反対して昂揚したのか、否か、ということだ」。以下、この前田氏の指摘をめぐって述べようと思う。まず私は、前田氏が「紅五類・黒五類こそが文革で問い直された」と主張する点について、この討議の時点で自分は認識不足だったと思っている。むしろ、このときの討議を通して、前田氏が自己の立場からこの問題を重視していることを理解した。前田氏は、文革のプロセスにおいて、「黒五類」にあてられて差別に苦しんでいた人々が造反したことを「文革で問い直された」と強調したのである。前田氏のほかのテキストを読むと、このことをもって、日本における学歴などによる差別に対する態度を考えようとしているのだと思われる。紅五類・黒五類という出身による序列を否定し造反することは、平等の方向に進むことであるから、その造反の思想的な依拠（すなわち文化大革命の理念と実践）を研究することは、日本における差別に対して否定し造反する行動の参考とすることができるだろう。

つぎに、以上を承けた二者択一の問題が設定され

ている。「大衆的な社会運動としての文化大革命は、はたして出身血統主義に反対して昂揚したのか、否か」という問題である。答えは「出身血統主義に反対して昂揚した」となるのだから、これを逆にすれば、出身血統主義に反対するのが文化大革命だということになりそうである。出身血統主義に反対するのが文革だとすると、文革の歴史的な側面で行くつかわかりにくいことが生じる。出身血統主義に反対する紅衛兵が登場するのは、おおよそ 1966 年 10 月くらいであるから、1966 年 5 月のいわゆる 5.16 通知（「定説」の文革発動）のころは文革ではないことになり、また、文革小組がおこなった 1968 年から 69 年にかけての、紅衛兵のいわゆる下放の本格的展開も文革とは言えなくなり、1969 年に林彪が後継者に指名されたこと、林彪のクーデター未遂、四人組の台頭などは文革とは関係ないことになる。

このように考えると、文革は 66 年から 68 年までの 3 年間だけだったことになる。いわゆる「三年文革」説に近いだろう。1966 年 5 月ころに「文化大革命」という言葉が使われているが、69 年以降に毛沢東や中国共産党が「文化大革命」という言葉を使っているが、それらは正しい意味での文化大革命の実践ではないということになる。つまり、文化大革命の理念・思想について、忠実な実践はどこにあったかという見方になる。

ところが、理念と現実とは容易には一致しがたいので、理念的な本体に対して、歴史事象は作用として、ほとんど常に、影のように大きくなったり小さくなったり黒くなったりして顕現する。私たちは、この影も文革とみなしてしまいがちなのだ。いわゆる文革時期の諸実践は、この 3 年間のある系列の実践だけが文化大革命と称するに堪えるものであり、ほかには文革の理念の影にすぎない。この点、前田氏が影のグラデーションを認めているかのような言い方をしても、誤解しないようにせねばならない。たとえば次のようだ。「もちろん、文化大革命は、毛沢東と党が権力を持つプロレタリア独裁のもとでの“特殊な”革命であり、国際的には米ソ共同支配の包囲下での革命だったから、現れは一律ではなく、地方ごとに党委員会の権力関係は複雑である」。つまり、地方的な文革のあり方は、北京中央のかたち

を反復しつつも、地方ごとの権力関係によって、中央とも他地方とも異なる顕現のしかたがあるという認識である。この場合の文革のあり方も、もちろん黒五類の造反のあり方を言っているのであって、「定説」的な文革の諸事件を含んでいるわけではない。したがって、文革時期に広西でおこった大量虐殺や人肉食のような事件がどんなにひどくても、それは文革の実践と考えるべきではなく、むしろ反文革というべきなのである。なぜなら、この事件を導いた韋国清は文革で打倒されるべきだった省長であり（彼は打倒を免れた）、殺され食われた者の多くは造反派だったからである。

いわゆる文革の含意の違いに注意しなければならない。私が前田氏と討議したときの意見の食い違いも、含意の違いに由来している。私が紅五類を文革の特徴の一つとみたのは、1966 年 6 月末ころから登場した紅衛兵らが、それ以前からあった階級序列を強調し、紅五類として文革における自分たちの正統性を主張したことを指している。しかし前田氏にとって、それは当時の政治運動などの結果として生じたものにすぎず、むしろ大衆の文革実践を阻害するものと言うべきなのである。つまり、文革の名の下における実践を「文革」というのか（この場合は歴史・時間的な含意に傾く）、文革の理念あるいはそれに近づく実践を「文革」というのか（この場合は思想的な含意に傾く）、この点に留意する必要がある。

私は、文革の事実を認識するために「大衆的な社会運動としての文化大革命は、はたして出身血統主義に反対して昂揚したのか、否か」という問題設定の有効性を認めるものである。おそらく、この問題設定は、80 年代以降の中国主流イデオロギーが文革を否定したかった原因のありかをえぐり出す通路の一つである。そして、ここでいう「大衆的な社会運動としての文化大革命」は、中国現代史において平等と民主を追究する方向性を持っていたと考える。その一方で、中国現代史には文革の発動によって生じた影のような事象が無数にあり、それを可能なかぎり認識しなければ、文革の理念も文革時期の中国社会も、ひいては中国現代史も理解できないと考える。これもまた、主流イデオロギーに抗する通

路の一つであるはずだ。主流イデオロギーになじんだ見方は、文革の理念を追い求めて造反した大衆の存在を消すだけでなく、それとは別の大衆の存在も、それを抑圧した権力も、文革という一言に包括させることで「否定」しきるからである。

2、文革の実践者の立場

以上の考えを広く共有するために、ハッキリさせるべきだと思うのは、文革の実践者としての紅衛兵・造反大衆の立場の認識である。これはまた、冒頭に言及したように、文革の罪責の問題とも関わる。端的に言えば、造反派の事実をしっかり認識し、いわゆる「造反派」の含意から解放することである。

現在に至るまで、造反派は「造反有理」という言葉と相まって、文革の代名詞となっている。すなわち、文革で造反した紅衛兵や大衆だけでなく、文革初期に天安門広場に登場した紅衛兵も、革命委員会に入った軍人・幹部代表・大衆代表も、その後諸単位に入った左派支持の宣伝部隊も、林彪を主とする軍人・江青を主とする文官も、すべて「造反派」とされた。したがって、文革期間におこなわれた凄惨なできごとのほとんどが、造反派のしわざと観念されている。すぐに気がつくように、この動向は 80 年代の文革否定のイデオロギーに起因している。このイデオロギーを進め、すべてを造反派の名のもとに否定したのは、共産党の政治権力と言説であり、政治家と知識人の共犯である。政治家が最も否定したいのは、66 年 10 月以降の造反による奪権であり、知識人が最も否定したいのは、文革初期の知識人批判である。そこで以下、66 年 10 月を境とした動向をとくにとりあげよう。

66 年 10 月の境にあるのは「批判資産階級反動路線」運動の発動である。このとき、党中央は通知を出し、文革工作組を批判して、反革命や右派とされた教師・学生らの名誉回復を正式にはかり、8 月までに登場した紅五類系の紅衛兵が主張していた出身血統主義を批判したのである。これにより、それまで結成されてはいたものの、紅五類系の紅衛兵および各地の党委員会から批判されていた非紅五類系の紅衛兵が、文革の主力となって、各単位の権力を批判し、造反をおこした。

前田氏が前稿で例示した劉衛東は、この非五類系の紅衛兵となった人物である。劉衛東はこう語る。「親が英雄なら、子は好漢、親が反動なら、子はアホウ。革命するなら毛主席に従い、革命しないなら消え失せろ！」などと罵倒された。まだあるぞ。「血統論」で、口汚くののしられた。これは、彼が文革の理想に燃えながらも、紅五類系の紅衛兵から抑圧されたことを言っている。さらに劉衛東はこう語る。「あのお方（毛沢東）は、この工作組と対立した立場におられたからだ。彼は「司令部を砲撃せよ」で、「革命派を包圍攻撃し、異なった意見を抑えつけ、わがもの顔で得意になり、ブルジョワ階級の威風を増し、プロレタリア階級の志気を挫こうとしている」など、一つひとつ痛快に語ってくださった。まさに、この発言は、排除され、抑圧され、甚だしくは独裁下に置かれた学生たちの心をつかんだのだ。これは、1966 年 8 月 5 日の毛沢東の大字報について言っている。

8 月 5 日の「司令部を砲撃せよ」のあと、各地で非紅五類系の紅衛兵が結成されるが、みな党委員会組織や紅五類系の紅衛兵・保守派労働者・機関幹部によって批判され弾圧された。その反作用が、10 月以降の造反のパネとなった。その一例として、武漢の「南下一小撮事件」がある²。

66 年 8 月下旬、中国人民大学の趙桂林らが、北京から交流のために南下して武漢の湖南大学 31 号楼に泊まり、経済学部の賈培培らが、これら南下学生の支持で、ここに「湖北大学紅八月戦闘隊」を結成、システム学部の学生会幹部で共産党員だった竜銘鑫が合流した。彼らは、毛沢東の「司令部を砲撃せよ」の通り、闘争目標を湖北省党委員会に向ける造反学生である。湖北省党委員会は、表面的には文革祝賀をしながら、南下した学生による支持で造反学生が力をつけたので、これらの学生をつまみだそうとした。このあと、武漢の文革は大荒れに荒れ、省委員会は労働者や紅五類系の紅衛兵を使って、造反学生を抑圧した。この抑圧が造反学生の恨みをさらに深め、年末までに造反の勢いは増し、学生らは鉄鋼工場の労働者と共同して「紅色造反司令部」を組織、とうとう湖北省党委員会第一書記の王任重を 66 年末に打倒して元旦に吊し上げた³。

この例からわかるように、非紅五類系の紅衛兵は、必ずしも出身が悪い(黒五類)というわけではない。湖北大学の造反学生は、エリートの人民大学紅衛兵の支持を受けているし、基幹学生も党員である。上掲の回想を書いた人は、当時、湖北大学の学生だったらしく、「党員学生幹部が公開で造反したことに困惑した」と述べている。つまり、このような現象は、毛沢東の働きかけで 66 年 8 月から新たに起こったことなのである。私見では、前掲の劉衛東が、自分と政治的立場が一致していたと語る四川大学のグループは「東方紅八・二六戦闘団」であり、これも出身の悪い人々ではない。彼らが打倒したのは、四川省第一書記の李井泉であった⁴。

このように見ると、66 年 5 月の文革発動と 10 月の「批判資産階級反動路線」運動のあいだに 8 月の「司令部を砲撃せよ」があり、毛沢東が期待する文革の実践主体を次々に変更していることに気がつく。第一に、66 年 5 月には、党の機構や党員・共青団の学生など、既成の党組織への働きかけで、そこから紅五類の子女による紅衛兵が生まれた。毛沢東の狙いは大衆動員であり、そのためには核となる結社や宣伝が必要だが、この時期以前に党以外の結社や宣伝が存在することはできなかつた。党以外の結社は地下活動であり、発見されれば党権力により解体される。党の組織以外に結社を存在させることができないから、毛沢東は党員の子女が紅衛兵組織を作るように導いた。7 月 28 日に清華大学付属中学の紅衛兵が大字報を中学工作組にきた江青にわたし、江青からその大字報を見せられた毛沢東が、彼らの造反精神への支持を書いた手紙を第 8 回十一全会の添付資料として会議参加者に配布した。結社の自由が公認された瞬間である。第二に、8 月に毛沢東は、紅五類の紅衛兵への支持を表明する一方で、劉少奇らの工作組による被抑圧者へも、運動への参加をよびかけている(前掲の劉衛東の例)。たとえば、謝若氷を 8 月 18 日の天安門上の接見に招いているが、謝若氷は、家族が 50 年代末の反右派運動で右派とされた黒五類の一員である。さらに毛沢東は、紅五類系紅衛兵の母体である党委員会への造反を提示した。この段階では、すでに結社や大字報や印刷の自由が成立していたので、非紅五類の人々も「紅衛兵」と

称することによって、結社や宣伝の自由を執行でき、文革の実践者として力をつけることができた。第三に、10 月には、より広範な大衆の動員を阻害する出身血統主義の紅衛兵は毛沢東から見捨てられ、黒五類を含んだ造反派が文革の主力とされた。

第一から第二のあいだ(6 月下旬)に、毛沢東が湖南の滴水洞で文革の進め方を長考したことからすれば、文革の実践主体をより広範な大衆へスライドさせていく上のような進め方について、熟慮していたようである。そうだとすれば、文革は 66 年に 3 回発動され、3 回目の発動で実践者を得たと言えるのではなかろうか。このようにとらえれば、文革と造反派の関係や紅五類系紅衛兵との差異を認識しやすくするように思う⁵。

3、紅衛兵の罪責の問題

上述の議論をふまえれば、紅衛兵が謝罪したという、前稿で紹介した次の新聞記事の見出しから、複数の問題点に気がつくだろう。2014 年 1 月 14 日、『産経新聞』が「元紅衛兵 相次ぐ謝罪 習政権の毛沢東路線反発」という記事である。それによれば、2014 年 1 月 12 日、元紅衛兵の宋彬彬が母校を訪ね、紅衛兵による被害を受けた教員や生徒に謝罪したとのこと。1966 年 8 月 5 日に、宋彬彬が学生リーダーをしていた北京師範大学付属高校で、生徒による卞仲耘副校長リンチ殺害事件が発生したことについての謝罪である。

第一に、ここでいう「紅衛兵」とは、紅五類系の紅衛兵であるから、これをもって紅衛兵の罪責の一般的な例とみなすことはできない。少なくとも、第三次文革発動以降の造反派紅衛兵の罪責の問題と混同してはならない。

第二に、宋彬彬が当該高校の紅衛兵になるのは、66 年 8 月 5 日より後である。早くとも、8 月 8 日に校内に「文化革命籌備委員会」が成立して以後である⁶。したがって、この事件は彼女が紅衛兵のときに起こったことではなく、事件と彼女の「元紅衛兵」という身分を結びつけるべきではない。

第三に、当時、当該高校に存在した紅衛兵組織は、7 月 31 日に成立した「毛沢東主義紅衛兵」だが、これは工作組に反対する生徒から成っていたし、も

う一つは、声を掛けると集まるような多数の生徒の団体があった⁷。しかし、この時期は出身血統主義が強かったので、副校長をリンチにするような革命行為は、反工作組の生徒や烏合の衆には考えにくい。したがって下手人は、紅衛兵ではないが、紅五類の人物の可能性が高い。

さて、この謝罪に対し、遺族である王晶焱は「虚偽の謝罪は受け入れられない」との声明を発表した。王晶焱の声明文によれば、宋彬彬は「効果的に止められなかったこと」「しっかりした保護ができなかったこと」「基本的な憲法の常識や法律の知識に欠けていたこと」を理由にして、みずからの当時の罪責を逃れているのであり、事件の真相を当事者たちが明らかにするまでは謝罪を受け入れられないと言っている。王晶焱は、リンチをした生徒たちを宋彬彬らが知っているはずだと考えているようだ。

じつは、宋彬彬が謝罪を発表したのは初めてではない。2007 年 12 月の原稿（2012 年 1 月に改定）の「四十多年来我一直想說的話（40 年来私が言いたかった話）」がそれである（本稿注 6）。そこでも、死者に対する哀悼と遺族に対するお詫びの意を表明しつつ、「自分がその日に阻止につとめなかったこと、反応がのろかったことが許せない」と言い、その原因を彼女が受けてきた「階級闘争教育」に帰している。

この考え方は宋彬彬個人だけでなく、彼女たちに共有されているようである。葉維麗は「卞仲耘之死」で次のように述べている。

私が卞仲耘の死について北京師範大学附属高校の同窓生に採訪したなかで、みんなの脳裏には一つの共通した問題が去来していた。それは、なぜ名門高校の「女の子」が殺人者になったのか。どうして私たちが「天真爛漫を失った」（かりにこの言い方をしておく）のかを掘り下げるとすれば、「文革」以前に私たちが受けた教育を真剣に検討しなければならぬ。そこでは階級闘争が日増しに強調され、それ以前に残っていた人文主義的な教育に取って代わった。

これは、教育による洗脳に原因を求めるものと言

えるだろう。かりにこの見解を認めるとしても、文革第三次発動以降の造反派の罪責を考えると、この論理は通用しないだろう。造反派はもっと自覚的で目的的である。紅五類系の紅衛兵が暴力をふるった相手は、すべて非武装の人物であり、多くが知識人だった。たしかに造反派も、紅五類系の紅衛兵と同様に、知識人や出身の悪い人物をつるし上げたりリンチしたりし、「破四旧」を実行した。しかし、彼らが暴力をふるった対象は、権力そのものであり、武装している集団の場合すらあったのであり、弱者を対象とする革命のアクトとはまったく異なる。造反派を研究する周倫佐はこう述べている。「（造反派は紅五類系の紅衛兵と同様な暴力をふるったが）それは彼らの本意ではない。こうした、大きな方向性ではない闘争の産物と彼らとは、生存のための複雑な関連がある。こうした行為は完全に彼らの階層（＝出身が悪い）の本性と食い違っているからだ。彼らの造反の主たる対象は終始、古い社会階層秩序を代表する実権派と古い社会階層秩序を擁護する保守派だったのだ」（周倫佐『文革「造反派」真相』2006 年、香港・田園書屋、68 頁）。古い社会階層秩序が弱者を抑圧するものである以上、造反派には正義があったという立場も完全にありうる。この点を考慮せずに、紅衛兵の罪責の問題を考えることはできない。

先日（2 月 2 日）の神奈川大学における「中国 文革をふりかえる」というシンポの席で、矢吹晋氏が次のような意味のことを述べた。本稿はこの指摘に啓発されたことを記しておこう。

造反有理という言葉は、造反には理があるという意味ではなく、造反すれば理が生まれる、と私は解釈してきた。魯迅が、地上にはもともと道はない、人が歩けば、それが道になる、と語った言葉と同じ意味ではないか。私はこのように解釈し、学生に説いてきた。魯迅はまた、狡猾とは弱者の正義である、とも語っている。ソ連型社会主義という名の管理社会、それをモデルとした中国型社会主義、そして資本主義という名の西側管理社会に対して、中国の内外の人々が造反を試みて、大きな挫折を体験した。その犠牲を過小評価することは許されない。「暴力という手段」が「革命の目的」を正当化できるの

か否か、これは古くして新しい問題である。しかしながら、その失敗のみをあげつらい、造反有理の正当性を否定するのは、歴史的な見方とはいえないのではないか。現代史を生きる人々の政治活動を罪と罰、反省と悔悟といった倫理的レベルでのみ理解するのは、木を見て森を見ない視野狭窄だと考える。中国の革命は依然未完である。検証は必要だが、何のためにどのように検証するかが課題だと認識している。

註

1 Susanne Weigelin-Schwiedrzik and Cui Jinke, "Whodunnit? Memory and Politics before the 50 th Anniversary of the Cultural Revolution", edited by Patricia M. Thornton, Peidong Sun and Chris Berry, *Redshadows: memories and legacies of the Chinese Cultural Revolution*, Cambridge University Press, 2016.

- 2 「武漢文革回憶：南下学生“鬧”江城」、もと蛇山脚下のブログに出されたが、すでに閉鎖されている。2009年6月に「中国文革研究網」に転載された。(<http://www.wengewang.org/read.php?tid=31849>)
- 3 その3週間後の現地写真が、荒牧万佐行写真集『1967 中国文化大革命』(集広舎、2017年)66、67頁にある。写真に見えるトラックの先頭の三角帽の賀邦儒は、湖北省党委員会機要処(人事課)副処長で、王任重をかばったために造反派から攻撃された。
- 4 土屋「下放の思想史」『文化大革命を問直す』土屋・「中国六〇年代と世界」研究会編、勉誠出版、2016年11月、アジア遊学203。
- 5 葉維麗によれば、印紅標が以上と同様な文革発動三回説を考えているようだが、発表されているか調査が及んでいない。葉維麗「卜仲耘之死」啓之編『故事不是歷史—文革紀実与書写』秀威資訊科技股份有限公司、2013年、注23。
- 6 宋彬彬「四十多年来我一直想說的話」啓之編『故事不是歷史—文革紀実与書写』391頁。
- 7 葉維麗「好故事未必是好歷史」啓之編『故事不是歷史—文革紀実与書写』58頁。

史料復刻

1964年8月28日付
人民日報社説

幹部は労働を堅持してはじめて革命を堅持できる

解題 前田年昭

【解題】現代史、同時代史の理解にあたっては、その国その社会の、歴史の大きな流れと関連させて面的に理解するという“モノを見る目、感じる心”が必要である。歴史を創造する主人公としての大衆をとらえたプロレタリア文化大革命(以下、文革)のもろもろのことがらのうち、四旧打破と下放(上山下郷)が青年大衆の心にふれ、毛沢東と党の思惑や予想をはるかに超える昂揚をもたらした基本的事実のなかに、文革の本質を正しく捉え、時代区分論をめぐる論議に決着をつけるカギがある。

ここに紹介する人民日報社説は、文革の昂揚の嵐を予見させるに十分な内容を持つものである。「幹部は労働を堅持して、はじめて革命を堅持できる」との表題自体、すでに進行しつつあった消費社会と都市化が、幹部の腐敗をもたらし、労働を堅持しないでは革命を堅持できないぞという批判と警告であった。文革が生起する前の数年間、すなわち1960年代前半、新中国建国によって得られた勤労人民の希望は、大きな失望と怨嗟に変わりつつあった。なぜなら、革命に血と汗を流した幹部を大切にするという気風は、学校出(清華大学や北京大学などの出身)がハバをきかせ、優等生が劣等生を、専門家が素人を、幹部がヒラを抑えつける官僚主義、修正主義が、党と社会をむしばみつつあったからである。

こうしたとき、この社説が1964年8月に出た歴史的意味はきわめて大きい。『北京週報』の同号に、『紅旗』通信員による「哲学戦線での新たな論戦「二つが、一つに融合する」という楊献珍同志の論点をめぐる討論について」が掲載されている。「一を分けて二となす」派による「二つが一つになる」派への論争であり、社会矛盾の根底にある教育と労働をめぐる二つの路線の対立と闘争が反映していた。

1963年5月には、毛沢東による社会主義教育運動の総括でもある哲学論文「人間の正しい思想はどこからくるのか」が発表されていた。文革の嵐はすぐそこまで来ていたのである。

各級幹部の集団的生産労働への参加は、すでに全 国の広範な農村で、ひろくおこなわれている。この

面では著しい成果をおさめた地方が少なくない。これは農村において、プロレタリア思想を興し、ブルジョア思想を一掃する階級闘争をおしすすめるのに大いに役だっている。幹部が集団的生産労働に参加するかしないか、この問題自体が深刻で先鋭な階級闘争にほかならない。大量の事実が明らかにしているとおり、集団的生産労働への参加を堅持しなければ、幹部は社会主義革命を断固としておしすすめることができないのである。

労働への参加不参加は階級的立場の問題

つぎのようなひじょうに多くの事実が幹部への大きな教育となっている。つまり、まだ十分に改造されていない地主、富農、反革命分子、悪質分子、ブルジョア分子、および資本主義の自然発生的傾向をわりあい強くもっている者は、幹部が労働に参加することをもっともおそれている。かれらはあらゆる手をつくして幹部が労働に参加することを阻止し、幹部を誘惑して労働から離脱させようとしている。これに反して、貧農、下層中農、および集団的労働にすすんで参加している圧倒的多数の社員たちは、幹部が労働に参加することをもっとも歓迎している。そして、いろいろな面から幹部が労働に参加することを援助し、幹部が労働から離脱することに反対している。

このようなくっきりと対立した二つの態度は、われわれの警戒にあたいるものであり、われわれの熟慮にあたいるものである。なぜ階級のちがった人びとが幹部の集団的生産労働への参加にたいして、このような完全に相反した二つの態度をしめすのだろうか。それは、「タビ勤ムレバ百巧ヲ生ジ、タビ怠レバ百病ヲ生ズ」からである。労働を熱愛するのは、プロレタリアートとすべての勤労人民の美德であり、安逸をむさぼり、労働をいやがるのは、搾取階級の残したもっとも悪い慣習の力である。人間は勤勉に働けば働くほど、奮起発憤の革命的精神をますます発揚することができ、人民大衆の労働の成果をますます大切にすることを知り、したがってまた思想の健全性をたもつうえにますます有益である。人間は一たん怠けると、享楽をおい、遊びにふけり、小さな目先の利益にやっきとなり、ひいては

どんな悪事でもしでかすようになり、欠点という欠点のみなとび出してくる。人間は、働かないでなにをたよりに生きていけるだろうか。働かなければ、どうしても他人の労働の成果を横とりしたり、ぬすみとったりするようになり、またどうしても以前の搾取者や寄生虫ともグルになって悪事を働くようになる。「労働に参加しない幹部は、結局承知のうえで、あるいは知らず知らずのうちに、働かないで収入を得ようとしたり、わずかな労働で多くの収入を得ようとする者の利益をまもるようになり、かれらの代理人になり下がってしまう。勤労人民とともに、どこまでも生産にはげむ幹部でなければ、勤労人民の利益をまもることはできないし、社会主義革命と社会主義建設をすすめる勤労人民のしっかりした導き手となることもできない。勤勉に働くか、それとも怠けるか、この二つのあいだには、何という大きなへだだりがあることだろう。この二つはまったく相反した道をゆくものである。一つはプロレタリア革命の大きな光明をもつ前途にむかってつきすすんでおり、他の一つは、没落した搾取階級の臭気にみちた泥沼へと歩みをすすめている。

ここからひじょうにはっきりと見てとれるように、幹部が労働に参加するかしないか、労働を熱愛するかしないかは、実質的にはどの階級の立場に立つかという問題である。幹部がもし労働に参加せず、労働を熱愛しないならば、圧倒的多数の勤労人民の側にしっかりと立つことができないし、働かないで収入を得ようとする搾取行為や搾取思想にだんことして反対することもできない。また搾取階級の思想にたやすくむしばまれ、資本主義の道にむかってたやすく「平和的転化」をとげることになる。真剣に勤労人民とともに、どこまでも労働に参加し、労働への無限の熱愛をそだて、つよめてこそ、幹部ははじめて貧農、下層中農の階級的隊列のなかに深く根をおろすことができ、はじめてどんなあらしの襲来をもおそれず、いつまでもゆるぎない立場に立つことができる。勤労人民出身の幹部は、このようにしてこそ、はじめてもともと持っていた刻苦質朴、勤労勇敢なすぐれた品性をいつまでも保持し、たえず発揚させ、どんな場合でも階級的立場にしっかりと立つことができる。非勤労人民出身の幹部はこうし

てこそ、はじめて労働をつうじて自己を勤労人民の一員に真に改造することができ、プロレタリアートの階級的な感情を真にそなえることができる。

生産労働への参加は階級闘争の指導に役だつ

社会主義教育運動のなかでのつぎのような生き生きした事実も幹部への大きな教育となっている。つまり、各級幹部が大衆とともに集団的生産労働に参加することを堅持してきたところでは、社会主義教育運動がわりあいよく展開され、農村の政治情勢もわりあい大きな変化をおこしている。社会主義教育運動のなかで、各級幹部が社員大衆とともに労働を堅持し、階級的自覚をたかめ、階級的な感情をつよめ、大衆から遊離した自己の誤りや欠点を認識し、それをあらため、自己の工作作风と工作方法を改善するのにいっそう役だっている。そのためにかれらの貧農、下層中農に依拠するという観点はより明確になり、各級の指導的中核と階級的隊列はよりかたく団結し、貧農、下層中農の優位はより強固にうちたてられた。このような状況のもとで、上層中農は大部分党支部と貧農、下層中農の側にいっそう接近し、わりあい積極的に集団的労働に参加するようになった。そして、階級敵は一段と分化し、頑迷なごく少数の地主、富農、反革命分子、悪質分子はいっそう孤立し、農村のいろいろな妖怪変化は声をひそめ、姿をかくしてしまった。幹部が労働に参加することを堅持しているところでは、歴史上残されてきた労働を軽視し、労働人民を軽視する古い思想、古い慣習が大きな打撃をうけ、集団的生産労働を熱愛し、集団的経済を熱愛する新しい思想、新しい気風がより急速に発展した。この結果、社員大衆の集団的生産への意欲がいっそうたかまり、各級幹部の生産指導がいっそうまくゆき、集団的経済の経営管理の面で新たな改善がおこなわれた。それゆえ、幹部が集団的生産労働に参加するのは、たんに生産闘争をより有利に指導するためばかりでなく、なによりもまず、階級闘争をきわめてりっぱに指導するためである。しかも、階級闘争をきわめてりっぱに指導しないかぎり、生産闘争と科学実験を、真に力強くおしすすめることはできないのである。

プロレタリアート独裁理論の重要な発展

各級幹部が生き生きした事実をつうじて、労働に参加した経験を総括するのを援助すると同時に、幹部を組織して、かれらに幹部の集団的生産労働への参加にかんする党中央と毛沢東同志の指示をあらためて学習させ、労働を堅持しなければ革命を堅持できないということの重大な意義を認識させなければならぬ。わが党はこれまでから、幹部が生産労働に従事することを提唱してきた。ここ数年来、社会主義革命の深まるにともなって、党中央と毛沢東同志は幹部の生産労働への参加にいっそう深い関心をはらい、このためにいくたびか指示をおこない、必要な制度を制定してきた。一九五七年五月、党中央は「各級指導者の肉体労働参加にかんする指示」をだし、各級指導者が一部の肉体労働に参加することによって、精神労働と肉体労働をしいに結合させることは、党の幹部が国内革命戦争を抗日戦争の時期に生産労働に参加したすぐれた伝統を発揚するものである、と指摘した。また、一部の同志は、古い社会の搾取階級の思想的影響をうけ、こうした過去のすぐれた伝統を忘れ、肉体労働を軽べつし、名利や地位をあさる一種の気風を増長させ、生産から離れたのちは再び生産のなかにかえるのを望まないが、これはひじょうに危険な傾向である。党はかならずこのような傾向とあくまでたたかわなければならない、と指摘した。さらに、この指示は、生産労働に参加するかしないかは、新しい歴史的条件下で、共産党員が党の全般的任務のために奮闘できるかどうかという大きな試練の一つであると、とくに指摘した。一九六三年五月、毛沢東同志は「幹部が労働に参加することについての浙江省の七つのりっぱな資料」にたいして評釈を加えて、幹部が労働に参加することの階級闘争における重大な意義をいっそうはっきりと指摘し、それを人民民主主義独裁を強化することや反革命の復活を防止することと関連させた。毛沢東同志がプロレタリアート独裁の実際の経験を総括したさい提起した一連の理論と政策のおもな内容の一つはつぎのとおりである。「幹部の集団的生産労働への参加の制度は、かならず堅持されなければならない。われわれの党と国家の幹部

は普通の労働者であって人民の頭上にのさばるだんではない。幹部は集団的生産労働への参加をつうじて、勤労人民ともしっかりと広範で、恒常的な、密着したつながりをたもつことができる。これは社会主義制度のもとで根本的意味をもった大問題の一つであり、官僚主義を克復し、修正主義、教条主義を防止するのに役だつものである」と。これはプロレタリアート独裁にかんするマルクス・レーニン主義理論の重要な発展の一つである。

幹部の労働への参加は社会主義革命の重要な内容

われわれの党と国家の性格と任務、社会主義革命の性格と任務は、ともに幹部が一定の制度にしたがって、物質的富をつくり出す生産労働に参加しなければならないことを決定づけている。われわれの共産党はプロレタリアートの前衛であり、すべての勤労人民の最高の利益を代表している。われわれの社会主義国家は勤労人民の天下であり、われわれの党と国家の各級の指導的中核は、革命家であるとともに普通の労働者である。社会主義教育とは、つまりあらゆる搾取制度を廃絶し、働かざるものは食うべからずという原則を実行しようとするものである。社会主義の時期とは、共産主義に移行する時期であり、この時期においては肉体労働者と精神労働者の差異を絶対に拡大すべきではなくて、この差異を少しでも縮小し、将来このような差異を一步一步消滅させるために、条件をつくり出さなければならない。もし、幹部が一定の生産労働に参加しないで、一般の勤労人民よりはるかに富裕な生活をおくるならば、きわめて容易に墮落変質する。したがって、各級幹部が普通の労働者の身分で勤労人民とともに生産労働に参加するかどうかは、社会主義革命を最後までやりとげることができるかどうかにかかわる大問題であり、革命幹部がいつまでも変色しないことを保障できるかどうかの大問題であり、それ自体が社会主義革命のきわめて重要な一部分である。

われわれの国家では、幹部が労働に参加するというこの革命は、すでにひじょうにりっぱなきかけがつくられている。しかし、この革命のもっている大きな困難さは、あらかじめ見こしておかなければならない。各地には、例外なくつぎのような事実が

存在している。つまり、ひとりの幹部は往々なん回かのくりかえしを経過し、まともな経験や教訓、逆の面からの経験や教訓をなん回かつみあげて、はじめて恒常的に労働に参加することができるようになり、そのうえ労働への参加と革命活動をしかりと結びつけるようになる。真の革命的自覚は、たびかさなる実践、認識、再実践、再認識を経、一回また一回とくりかえされる思想闘争を経てこそはじめて確立できるものである。このような思想革命は、幹部の自己教育をつうじてすすめるなければならない。しかし、すべての分野における社会主義革命の大衆運動が、みな自然発生的におこなわれえないのと同じように、広範な幹部の集団的生産労働への参加という革命的自覚も、自然発生的にたかまることはできない。このことにたいしては、かならず各級党組織がくりかえして教育と指導をおこない、さらに適当な制度をもって、それを保障しなければならない。

農村では、幹部が労働に参加することは、幹部と貧農、下層中農の階級的隊列をしかりと結びつけるひじょうに重要な帯の一つであり、また、あらゆる搾取階級の思想的腐食に抵抗するもっとも効果的な武器の一つでもある。また、それより深い意義は、つぎの世代のために手本をしめし、革命の継承者の健全な成長の道を指摘するということである。各級幹部とこれからの一代、一代の革命の継承者は、すべてプロレタリアートの階級闘争の観点をもって労働を認識し、これに対処し、たえず階級的覚悟をかめるという基礎のうえにたち、制度にしたがって集団的生産労働に参加することを堅持しなければならない。この点をなしとげれば、われわれの革命的隊列がいつまでも強固であり、われわれの革命事業がたえず勝利をおさめるという問題は、もっとも重要な一つの面でたしかな保障を獲得したことになる。幹部が労働に参加することは、政治的、思想的、経済的にいえば、いずれも大きな意義と深い影響をもった革命である。各戦線において社会主義革命を最後までやりとげようとするならば、かならず幹部が労働に参加するというこの革命を最後までやりとげなければならない。

〔『北京周報』1964年9月15日号、第2巻第37号、通巻60号、北京周報社〕

秋雨教会弾圧事件をめぐって

土屋昌明

四川省成都にある秋雨教会が昨年 12 月 9 日に大規模な弾圧を受け、王怡牧師らが拘留されただけでなく、100 人以上の関係者・信徒が取り締まりを受けたという（詳細は不明）。この教会は、王怡と夫人の蒋蓉が 2005 年に設立した非政府系の教会で、500 人を超える信徒がいた。王怡はもと法学者で、いわゆる公共知識人として著名だった。劉曉波らの「08 憲章」にも署名している。王怡に対する抑圧は今回が初めてではなく、以前からしばしばあったらしい。2008 年 5 月に、秋雨教会が主催する修養会について、成都市双流県宗教局が違法として行政処分を下し、教会側はこの処分取り消しを人民法院（地方裁判所）に訴えた。その後も教会側は司法に訴える手段を使い、人権派弁護士として知られる李和平を法律顧問にした。その後、2015 年 7 月の人権派弁護士一斉検挙で李和平は逮捕された（2 年弱にわたって拘留され、2017 年に釈放）。2018 年 5 月には、本教会が四川大地震 10 周年の記念を企画したが警察の抑圧を受けた。

今回王怡は、国家政権転覆罪に問われているようである。ドイツ在住の亡命中国人作家である廖亦武によれば、王怡が懲役になった場合、劉曉波の 11 年より長期になるだろうし、その社会的影響は劉曉波より大きいものとなるだろうという。

この教会の信徒のなかに、本研究会で一昨年に招いて上映講演会を開催した張先痴と楊文婷夫人がいる。彼らは、1 月 10 日夜半 2 時すぎに、数名の警察官と社区の人員による警告を受けた。「秋雨聖約教会」が取締りを受けて責任者は捕まったことを告げられ、教会の活動に参加しない誓約書にサインをするよう求められ、拒絶したようである。張先痴は高齢で、視力を失いかけており、ストレスの高い警告を受けて大丈夫だろうか心配だったが、案の定、その後、入院して今に至っている（本誌掲載『「格拉古軼事」作者・張先痴氏への敬意をこめて』参照）。

王怡が嫌疑を受けている国家政権転覆罪は、クーデター行為に対して適応されるべきもので、王怡の行動のところがそれにあたるのだろうか。拘留後に発表された「私の声明：信仰的不服従」に次のように述べている。

聖書の教えと福音の使命に基づき、私は神が中国にお立てになった権力者を尊重する。なぜならば、王を廃するのにも王を立てるのにも、みな神がなさることだからである。それゆえに、私は中国の歴史と制度に対する神の御計画に従う。

キリスト教会の一牧師として、私は聖書に基づきながら、社会・政治・法律などの諸領域に関して何が正義ある秩序であり、何が善なる統治であるかという自分自身の理解と見解を持っている。同時に、私は中国共産党政権の教会迫害や、人々の信仰の自由・良心の自由を奪う罪悪に対して、大きな嫌悪と怒りを覚えている。しかし、社会制度や政治制度を変革しようとする一切のことは私が召された使命ではなく、また福音を与えられた神の民が目的とするところでもない。

なぜならば、あらゆる現実の悪、政治的不正義、恣意的な法律は、すべての中国人が必要としている唯一の救い、すなわちイエス・キリストの十字架を指し示しているからである。またこれらのことは、真の希望や完全な人間社会といったものは地上のいかなる制度や文化の変革の中にも存在せず、ただ人間の罪がキリストによって赦され、永遠の希望を得るところにしか存在しないことを示している。

牧師としての私の、福音に対する確かな信仰、人々に対する指導、またすべての罪悪に対する非難はいずれも、福音におけるキリストのご命令に基づくものであり、栄光に満ちた王である方のはかり知れない愛に基づくものである。すべての人間の命はこのように短きものであり、それゆえ神は教会に対して、悔い改めたいと願うすべての人を悔い改めへと導き、召し出すようと、強く命じておられる。キリストは罪から立ち返るすべての人を、速やかに、そして喜んで赦そうと願っておられる。これこそが教会が中国においてなすべきすべての働きの目的である。すなわち、世界に対してキリストを証し、中国に対して天の御国を証し、地上の短き人生に対して天上の永遠の人生を証しすることである。このことは、私自身に与えられた牧師としての召命でもある。

以上の理由により、中国共産党政権が神がお許しになられた一時的な統治者であることを、私は受け入れ、尊重する。主の僕であるジャン・カルヴァンが「悪しき統治者は悪しき人民に対する神の裁きである」と述べているように、その裁きの目的は、神の民が神に向かって悔い改めるよう促されるためである。それゆえに、主の教えと鍛錬に従うのと同様に、私は体において彼らの法の執行に喜んで従う。『キリスト新聞社ホームページ』(<http://www.kirishin.com/2018/12/18/21622/>)

彼の主張では、彼および彼の教会が政治には関与せず、中国共産党政権を尊重し、その制度に従うことが明示されている。にもかかわらず、彼は弾圧された。そうなると、問題となっているのは何なのか。もしかしたら、政権に対する霊的な不服従の呼びかけにあるのではなからうか。ここに私は、中国の現政権が「魂にふれる革命」ならぬ、「魂を洗う革命」を企んでいるのではないかという危惧を感じざるを得ない。王怡はそのことを「魂の戦争」と言っている。彼は教会での説教で、次のように述べている。

(ニュー YORK タイムスによれば) この国は魂に対する戦争をしかけているところだ。これは最重要な戦争である……しかし彼ら(中国政府)は、むしろ逆に、永遠に押し込めることのできない、永遠に壊滅させることのできない、永遠に降伏させ征服することのできない一個の敵を自分から作りだしてしまうのだ。それは人の魂である……だから彼らは必然的に失敗する……霊的な生活こそは人間の生活の本質であり、またキリスト信仰こそ我らにとって最も失うべからざるもの、大切なもの、我ら罪人が唯一持っている財産であるゆえに、この国が我らの唯一の財産を奪い取りにくるにあたっては、我らに聖霊が満ちるよう神に求めるのだ、アーメン。それだけでなく、我らが受ける迫害によって、中国社会に迫害を受けるという福音を伝えさせ、彼ら(中国人)をして自身の価値とはいくばくのものか考

えさせるよう、神に求めるのだ。このような専制的な、金銭的な、絶対権力の統治において、彼らの尊厳、プライド、自由とはいったいどこにあるのかと……(この説教の映像は【盟視界】中国需要上帝的呼召でネット検索できる)

「靈魂の戦争」(Spiritual warfare)は、墮落した使いたちと、キリストに従う者との霊的戦いのことをいう。王怡は、その概念を使って、中国共産党が中国国民の政治的な支配だけでなく、精神的な支配をめざしていることを言っている。つまり、水も漏らさぬ独裁政権の「中国的社会主義」による個人の行動と財産の電子的な完全監視は、「小人閑居して不善を為す」式の中国人の魂を革命し、精神は物質によって規定されるという唯物主義の正しさを証明するのである。これに対して王怡の考えでは、キリスト教信仰による魂の霊性は、物質的な欲望にもとづく中国的社会主義を超越しており、殉教を通して顕現する、その霊性の崇高さをもって中国人に覚醒を求めようというのである。

権力側からすれば、従来、宗教局に登録せずに家庭内でおこなわれていた教会は、信徒が多数にならなければ黙認してきた。今回の弾圧は、信徒が多くなりすぎ、行動が目立ってきたという理由だけでなく、また、宗教教団が暴動の原因になるという伝統的な規制原因でもなく、その根本に、政権のイデオロギー政策の完遂にとって邪魔物は消す、という権力の意志を示したものと言えよう。 ☆

『格拉古軼事』作者・張先痴氏への敬意をこめて

* 以下は、2019年1月20日に「長江石与青年《痴》」と題して「張新偉 凹凸鏡 DOC」に掲載されたエッセイの末尾にある、張先痴の医療費のためのクラウド・ファンディングの呼びかけである。張先痴は1934年生まれ。反右派運動で批判され強制労働に従事させられた経験を記憶し、釈放後に書いて出版した著書に『格拉古軼事』『格拉古実録』『格拉古夢魘』がある。これらの本によって、反右派運動が中国社会に何をもたらしたか考えることができる。人身束縛の収容所における驚くべき人間性を描いた文学として読むこともできる。ソ連のグラウグの生活を描いたソルジェニツインに喩えられている。その彼の募金活動のQRコードが何者かに乗っ取られ、振込先はいずれも知らない口座に書き替えられた。政治的批判を受け、20年以上も強制労働させられた上に、現在に至るまで不当な扱いをされ、老齢での病氣治療すら妨害されるという境遇は、いったい何故なのか。「右派」とされた人物(その子女は「右二代」という)に対する

抑圧は、戦後から現在に至る中国社会の基軸と言え。また、それを認識することが中国社会を善い方向に変えていくと信じる人々に私たちは声援を送るべきだろう。

校正中の2月21日18時30分(北京時間)に張先痴氏のご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

(編集部 T、翻訳も)

この新年(2019年1月)、我らが尊敬する四川の老作家・張先痴氏が再び入院しました。今回の病状は深刻です。初期的な診断によれば、慢性閉塞性肺疾患が後期に至っており、肺の半分はすでに正常な機能を失っているとのことです。現段階では、病棟で感染症の治療に全力をあげています。積極的に治療を進めて退院できることを期待していますが、進展は緩慢で、昨晩はとうとう咯血症状がありました。

入院以来、張先痴さんの妻・楊文婷さんがずっとかた

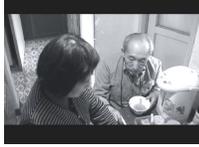
〔(28)ページへつづく〕

胡傑監督『私が死んでも』字幕（最終回）

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

83



门牌：中国社会科学院昌运宫宿舍

表札：中国社会科学院 昌運宮宿舍

王晶焄：哎呀，我去转转。

王晶焄：（吃饭）另外我这个老伴，我们很重要的一句话，我就跟她说，我说我有这样的事情，我要做这样的事情，我希望你能够支持，她同意了，有这个前提，我们才结婚。

胡杰：伯母已经和你生活了多长时间了？

王晶焄：三十多年了。她很同情我的不幸的遭遇，对我一直照顾的非常好，她对我几个孩子，不是亲生胜似亲生，感情非常非常好。

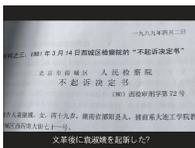
王晶焄：ちょっと、出かけてくる。

王晶焄：（食事をしている）私のこのつれあいには、大切な話があるといって、話した。私にはこういう事情がある。これをやらなければならない。君にも分かってほしい。彼女は同意してくれて、その前提の上で、結婚した。

胡杰：一緒に暮らしてどれくらいになりますか？

王晶焄：30年あまりになる。彼女は私の不幸な境遇に同情して、ずっとよく面倒をみてくれている。子供たちに対しても、実の子のように接してくれて、とても仲良くやっている。

84



胡杰：文革后你起诉过袁淑娥？

王晶焄：检察院不予起诉。

胡杰：为什么不予起诉呢？

王晶焄：罪他承认有罪，但是，时间过了。

胡杰：就是袁淑娥？

王晶焄：唉，袁淑娥。最高人民检察院办公厅对王工代表建议的答复，这是编号。承认她有罪，但是为她辩护，辩护以后是不与起诉。那时候公检法都打碎了，都不管。但是他还有一个不予起诉，起诉期已过的问题。是1981年批的。

胡杰：它的批复是怎么说的？

王晶焄：你看。据此我们认为，西城区人民检察院（1980年），西检对袁淑娥不起诉的决定拟予维持。法治其名，人治其实，官官相护，何患无词！

胡杰：这是你接到不予起诉后写的。你当时写这个，你是怎么想的？

王晶焄：我不服啊！

胡杰：文革後に袁淑娥を起訴した？

王晶焄：檢察は起訴しなかった

胡杰：なぜ不起訴に？

王晶焄：罪があることは認めた。でも、時効だと。

胡杰：袁淑娥がですか？

王晶焄：そうだ。「最高人民檢察院弁公庁の王工代表の意見に対する回答」、これが文書番号。袁淑娥の罪は認めた。けれども彼女を弁護して、弁護のあとには不起訴だ。当時は警察や司法機關が機能せず、誰も管理できなかった。もう一つ不起訴になった理由は、起訴期間が過ぎていたからだ。これは1981年に決定が出た。

胡杰：決定書には何と？

王晶焄：これを見ろ。「よってわれわれは、西城区人民檢察院の1980年の決定、袁淑娥に対する不起訴を支持する」。法治という名の人治、役人同士かばい合うから心配無用！

胡杰：不起訴と知ってこれを書いた。どんな気持ちだったのですか？

王晶焄：納得できるものか！

85



王晶焘：那，手表。

胡杰：当时手表拉成这样。拉坏了。

王晶焘：唉，手表，这是她的工作证（校徽），这是她继母的遗产。战地服务章。

胡杰：这个战地服务团是最早的？

王晶焘：啊，最早的。唉，头发。

胡杰：你看这个表是停在了3点40上。说明3点40的时候这个表就弄坏了？

王晶焘：对。

胡杰：这是什么？

王晶焘：创口，从嘴里面掏出来的药棉。

胡杰：你觉得这些东西将来是要保留在文革博物馆的？

王晶焘：那当然是。你看，这是身上的窟窿，洞、有血、嘴里边。你看血的纱布。你看，这是后来我们孩子们带去准备给她包起来的手绢。这都是到医院剪开的。

胡杰：土啊。躺在地上？

王晶焘：对对对，弄地上的，而且还泼了水，这是裤子了，裤子是这样，粪便。粪便。

胡杰：当时被打以后大小便都失禁？

王晶焘：哎，哎哎。你看这是短袖衫。袜子。这是纺绸的衬衫。

胡杰：这上头写的墨字，能看出来写的是啥吗？

王晶焘：当时都没看，当时是湿的。能看出来吗？

胡杰：看不出来。这是打倒的倒字，这是在衬衣的背面是吧？

王晶焘：其实我是第一次动它。纽扣还扣着。这是医院剪的。是反面，不是扣子在这儿吗？口袋里手绢，两个手绢，当时都没动过。

胡杰：这已经三十九年了，这是第一次打开？

王晶焘：唉，第一次。上一次就是湿的。土还在，里面土。

胡杰：卞老师最喜欢什么音乐？

王晶焘：《黄河大合唱》里面的《黄河颂》，《保卫黄河》，另外还有，就是我们进入太行山时《在太行山上》，正好是年底，45年年底，我们到了晋冀鲁豫军区，开联欢会，我们新到的，新年联欢，同时又欢迎我们，必要我们唱歌，我不会唱，她平时个人是喜欢唱的，我们唱的在太行山上。

（唱）红日照遍了东方，自由之神在纵情歌唱，看吧，千山万壑，铜壁铁墙，抗日的烽火燃烧在太行山上，

气焰千万丈。听吧，母亲叫儿打东洋，妻子送郎上战场。

王晶焘：新华社同陕北广播电台就在太行山。

胡杰：你说那是什么社？

王晶焘：临时总社，1947年延安撤退以后，晋冀鲁豫边区在太行山武安县成立一个临时总社，同一个陕北台一个接替的临时电台，当时他们没有准确的钟表，这个就借了卞老师的表。

胡杰：它一直就来计时，在那时候？

王晶焘：腕時計だ。

胡杰：当時引きちぎられたのですね。

王晶焘：そう、腕時計だ。これは彼女の校章。継母の形見なんだ。戦地服務員章。

胡杰：最初の「戦地服務団」の？

王晶焘：ああ、最初のだ。ううん、髪の毛だ。

胡杰：この時計は3時40分で停まっている。その時間に壊されたということ？

王晶焘：そうだ。

胡杰：それは？

王晶焘：傷口、口に詰め込まれていた脱脂綿。

胡杰：これらは将来、文革博物館に保管すべきだと？

王晶焘：もちろんだ。ほら、身体がえぐられているんだ。口の中は血だらけだ。ガーゼが血に染まっている。見てくれ、これはあとで子供たちが彼女をくむのに用意したハンカチだ。病院へ行ってハサミで切ったものだ。

胡杰：土だ。地面に横たわっていたのか？

王晶焘：そうだ。地面に寝かされ、水をかけられた。これはズボン。こんなに糞便がついている。糞便だ。

胡杰：殴られて失禁したのですね？

王晶焘：ああ。これは半袖シャツと、靴下だ。これはシルクのシャツ。

胡杰：この墨の字は、何と書いてあるんだろう？

王晶焘：当時は気がつかなかった、濡れていたから。読めるかね？

胡杰：読めませんね……。これは「打倒」の「倒」。シャツの背中ですね？

王晶焘：実はこうして動かしたのは初めてなんだ。ボタンが留められたままだ。これは病院で切ったんだ。これは裏、ここにボタンがあるじゃないか。

ポケットにハンカチが、2枚あるね。当時は少しも動かさなかった。

胡傑：39 年も経って、初めて開けた？

王晶焄：初めてだ。当時は湿っていた。土がまだ中にあるね。

胡傑：卞先生はどんな音楽が好きだった？

王晶焄：「黄河大合唱」の「黄河頌」「黄河を守れ」、それから、我々が太行山に入ったときの「太行山の上で」、あれはちょうど 1945 年の年末だった。晋冀魯豫軍区に着くと、親睦会を開いて、我々は新入りだから、新年会は、同時に我々の歓迎会だった。我々は歌わないといけない。私は歌はだめだが、彼女は普段から歌うのが大好きで、我々は「太行山の上で」を歌った。

(歌) 紅い太陽が東をあまねく照らし、自由の神が心ゆくまで歌う。見よ、果てしなく連なる山と谷、敵を阻む鉄壁のごとく、抗日の烽火は太行山の上に燃えあがる、その炎の高いことよ。聞け、母は子に侵略者を討たせ、妻は夫を戦場に送り出す。

王晶焄：新華社と陝北ラジオ局が太行山にあった。

胡傑：どういう形で？

王晶焄：臨時の本社だ。1947 年に延安を撤退して、晋冀魯豫辺区が太行山の武安県に臨時の本社と、陝北ラジオ局に代わる臨時の局を作った。当時は彼らには正確な時計がなくて、この卞先生の時計を借りたんだ。

胡傑：当時はこれで時を計っていたのですね？

86



王晶焄：哎呀，这是我的心事。我跟你說，我死了，如果有骨灰盒的話，我上面寫八個字：“生于夢想，死于夢想”。

王晶焄：ああ、これが心残りなことなんだ。きみに話しておく。私が死んで、遺灰を収める箱があったら、そこにこう書きたいんだ。「幻しと共に生き、幻しと共に死す」。

87

广大的工农兵，革命的知识分子和革命的干部，是这场文化大革命的主力军。一大批本来不出名的革命青

少年成了勇敢的闯将，他们有魄力、有智慧，他们用大字报、大辩论的形式，大鸣大放，大揭露，大批判，坚决的向那些公开的，隐避的资产阶级代表人物举行了进攻。在这样大的革命运动中，他们难免有这样那样的缺点，但是，他们的革命大方向始终是正确的。这是无产阶级文化大革命的主流，无产阶级文化大革命正在沿着这个大方向继续前进。文化革命既然是革命，就不可避免的会有阻力，这种阻力主要来自那些混进党内的走资本主义道路的当权派，同时也来自旧的社会习惯势力。这种阻力目前还是相当大的顽固的，但是，无产阶级文化大革命毕竟是大势所趋，不可阻挡。大量事实说明，只要群众充分发动起来了，这种阻力就会迅速被冲垮，由于阻力比较大，斗争会有反复，甚至可能有多次的反复，这种反复没有什么害处，它将使无产阶级和其他劳动群众，特别是年青一代得到锻炼，取得经验教训，懂得革命的道路是曲折的、不平坦的。五 坚决执行党的阶级路线。谁是我们的敌人，谁是我们的朋友。这个问题是革命的首要问题，也是文化大革命的首要问题。党的领导要善于发现左派，发展和壮大左派队伍，坚决依靠革命的左派。这样才能够运动中，彻底孤立最反动的右派，争取中间派，团结大多数。经过运动最后达到团结百分之九十五以上的干部，团结百分之九十五以上的群众。集中力量打击一小撮极端反动的资产阶级右派分子，反革命修正主义分子。充分的揭露和批判他们的反党、反社会主义、反毛泽东思想的罪行。把他们最大限度的孤立起来。这次运动的重点是整党内那些走资本主义道路的当权派。十六 毛泽东思想是无产阶级文化大革命的行动指南。在无产阶级文化大革命中，要高举毛泽东思想的伟大红旗，实行无产阶级政治挂帅。要在广大工农兵、广大干部和广大知识分子中，开展活学活用毛主席著作的运动，把毛泽东思想作为文化革命的行动指南。各级党委要遵守毛主席历来的指示，贯彻执行从群众中来到群众去的群众路线，先做学生，后做先生……

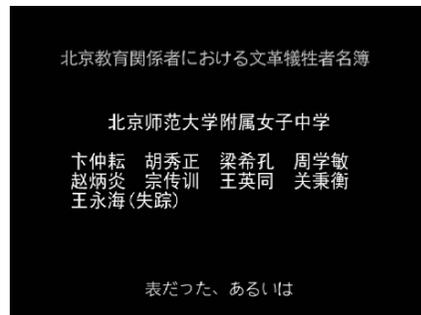
(いわゆる文革の「十六か条」のラジオ音声) 広範な労働者・農民・兵士、革命的知識分子、革命的幹部は、この文化大革命の主力部隊である。もともと名も知られなかった多くの革命的青少年が勇敢な猛将となっている。彼らには気迫があり、知恵がある。彼らは大字報や大討論の形で、大いに意見を述べ、

大いに暴露し、批判し、表立った、あるいはひそみ隠れたブルジョア階級の代表者に断固とした攻撃をくわえている。このように大きな革命運動の中では、彼らにもあれこれの欠陥は免れがたいが、彼らの革命の大きな方向は一貫して正しいものである。これはプロレタリア文化大革命の主流である。プロ文革は、いま、この大きな方向に沿って引き続き前進している。文化革命が革命である以上、阻害する力にあうのは避けられない。このような阻害する力はおもに党内にもぐりこんだ資本主義の道を歩む実権派から来るが、また古い社会の習慣の力からも来る。こうした阻害する力は、今のところまだかなり大きく頑強である。しかし、プロレタリア文化大革命は、つまるところ、大勢の赴くところであって、阻むことはできない。多くの事実が物語るように、大衆を十分に立ち上がらせさえすれば、こうした阻害する力は急速に押しつぶされるのである。阻害する力が比較的大きいため、闘争は反復されるし、何回も反復される可能性さえある。こうした反復にはなんの害もない。プロレタリア階級と勤労大衆は、特に若い世代はそこで鍛えられ、経験と教訓を汲み取り、革命の道が平坦ではなく、曲がりくねったものであることを理解するだろう。五、党の階級路線を断固実行すること。我々の敵は誰か、我々の友は誰か、この問題は革命の最重要問題であり、文革の最重要問題でもある。党の指導部は左派を見つけだし、左派の隊列を発展させ大きくし、断固として革命的左派に依拠しなければならない。こうしてこそ、運動の中で、最も反動的な右派を完全に孤立させ、中間派を獲得し、大多数を団結させ、運動を通じて、最終的には 95% 以上の幹部を団結させ、95% 以上の大衆を団結させる。力を集中して、一握りの極反動的ブルジョア右派分子や反革命的修正主義分子に打撃をくわえ、彼らの反党、反社会主義、反毛沢東思想の犯罪行為をあますところなく暴きだし、批判し、彼らを最大限に孤立させることである。この運動の重点は、資本主義の道を歩む党内の実権派である。十六、毛沢東思想はプロレタリア文化大革命の行動

の指針である。プロレタリア文化大革命では、毛沢東思想の偉大な赤旗を高く掲げ、プロレタリア階級の政治による統率を実行しなければならない。広範な労働者・農民・兵士、広範な幹部、広範な知識人の間で、毛主席の著作を活学活用する運動を繰り広げ、毛沢東思想を文化革命の行動の指針としなければならない。各級の党委員会は毛主席の従来からの指示を守り、大衆の中から大衆へという大衆路線を貫き、まず学生となって、それから先生となる……

北京教育系统部分文革死难者名单 (王友琴提供, 影片作者编辑)

北京教育関係者における文革殉難者名簿 (王友琴提供, 本編作者編集)



1966 - 2006 文革四十周年

1966 ~ 2006 文革 40 周年

在这个事件中的学生参与者和目击者没有人同意接受采访

この事件に関わった学生と目撃者は、誰もインタビューに同意しなかった。

鸣谢：章诒和 王友琴

章诒和、王友琴に謝意を表す

纪录片制作者 胡杰

2006---2009

制作者 胡傑

2006---2009

《完》

今後の研究会予定

4月25日(木)19時～、専修大学神田校舎1号館12階社会科学研究所
発表者・題目 未定

歳出し批評

日本における東洋史学の伝統（上）

旗田巍^{たかし} 解題 前田年昭

【解題】ここに紹介するのは 57 年前に大きな社会問題となったアジア・フォード両財団資金問題〔本誌第 2 期第 9 号 pp.9-14「研究ノート」参照〕をめぐる論議のなかで、東洋史学者・旗田巍（1908-1994）によって書かれた東洋史学史総括である。旗田はここで、日本のアジア侵略体制を「離れては研究者としての私は存在しなかった」自身と史学史を振り返り、「人間不在の実証的研究を正しい歴史学とみとところに、従来の東洋史学の大きな特色がある」と総括している。「研究者自身の努力によって、研究の純粹性を守りうる、という考え」に対して、「実はここに問題がある」として、「現実をはなれることは、つきつめていくと学問から思想を除去することである」と指摘している。学問は人民が現実を負う苦難解決のために存在する。歴史学は人々が歴史創造の主人公としての知恵と力を得るためのものである。

はしがき

フォード・アジア両財団の資金援助による中国研究の当否が、アジア研究者のあいだで大問題になっている。その主たる論点は、この資金をもらって果して自主的研究ができるかどうか、アメリカの極東政策に利用されるおそれはないか、このことが日本と中国とのあいだの学術交流に害を及ぼすことはないか、などである。同時に、この論議を機会にして、日本における中国研究の体制や研究費のことが問題になっている。これらの諸点の検討は、わが学界の正常な成長のために必要なことであるから、一層の論議が望ましい。

ただ私が不思議に思うのは、この問題についての論議が、研究の政治的影響や研究費などに限られ、研究の主體的性格が見のがされていることである。研究の外部的条件だけが熱心に討議されて、その内面的性格が忘れられている感がする。この資金の問題は単なる研究条件の問題ではなく、日本におけるアジア研究・中国研究の伝統的性格につながるの問題だと思う。

これまでの論議の経過をみると、両財団の資金をうけとることによって、日本の中国研究の分野にどういふ新しい不安な事態がおこるおそれがあるか、という点に論議の重点がおかれている。両財団から金をもらって研究することを新しい事態と考え、そのことが今後ひきおこすおそれのある諸問題について、論議が集中している。しかし日本におけるアジ

ア研究の歴史をふりかえてみると、これは果して全く新しい事態であろうか。私はそうは思わない。形はちがうが本質的には多分に共通性のある事態を何度も経験している。あまりにも経験しすぎて、気にかからない程に経験している。まずそのことを知るべきである。同時に、そういう経験にさいして、それに何の不安も感じないで当り前のこととして見すごしてきた日本の学界の伝統、現在においても、これについて反省・批判の乏しい学界の伝統が問題である。私自身こういう学界で育ってきたもの一人として、今回の問題を考えるに当っては、わが学界の伝統を思いおこさざるをえない。

日本のアジア研究者は、敗戦以前においては、たえずアジア侵略勢力の援助をうけ、それと結びついて研究を進めてきた。そういうさいの援助の受けとめ方は、人によって、場合によって、さまざまであった。しかし大多数のものがそういう経験をしたことは争えない事実である。注意すべきことは、そういう経験が学問の内容と無縁ではなかったことである。日本のアジア研究は、そういう経験の積みかさねの中で成長し、学問の性格を形成した。そこには、こういう経験に対応する一つの伝統的性格がある。それは現にわれわれが身につけ、殆んど意識すらしていないほどに根深いものである。この伝統的性格は、両財団の資金援助による中国研究を肯定する態度と無縁ではない。こういう学問の伝統を掘りおこして検討することが、これからのアジア研究の成長のために必要だと思う。また当面している問題

の解明のためにも必要だと思う。私はアジア研究の諸分野のうち、その重要な一部分である東洋史学を中心にして、日本におけるアジア研究の伝統的性格を考えてみたい。

I アジア侵略とアジア研究

日本におけるアジア研究は、アジアに対する日本の軍事的発展に対応して成長してきた。大ざっぱに言って、日本のアジア侵略は、明治初年から敗戦にいたるまでに、朝鮮→満蒙→中国→東南アジアという方向に進められたが、アジア研究も大体この線にそって成長した。明治前期に日本の大陸発展の第一歩が朝鮮に向けられていた頃には、学界の関心が朝鮮に集中し、歴史家・法制史家・言語学者などが朝鮮を研究した。これは学問としてのアジア研究の第一歩であった。つづいて日清・日露の戦争で日本の朝鮮支配が確立し、さらに満蒙へ支配が伸張すると、朝鮮研究につづいて満蒙研究がさかんになった。日本の東洋史学が学界で地位を確立したのは、まさにこの時期であった（東洋史という名称が始めてあらわれたのが 1894 年、東京帝国大学に支那史学科ができたのが 1904 年、それが東洋史学科と改称されたのが 1910 年）。日本の東洋史学は中国本土よりも塞外の研究に力をいれる傾向があったが、それは東洋史の成立事情、その背景をなした大陸発展と深い関連がある。そののち大正から昭和にかけて中国本土に対する侵略が積極的に展開されると、中国研究がさかんになった。とくに日本と中国との全面的戦争が始ってからは、中国研究が異常に高まり、中国に関する著書や論文が無数にあらわれた。つづいて太平洋戦争が始まり、大東亜共栄圏が高唱されると、東南アジアに対する研究がおこってきた。その間に朝鮮統治の進展、満洲国の設立によって、朝鮮や満蒙の研究も一段と推進された。要するに日本の支配圏の拡大に伴ってアジア研究の領域は拡大していった。

こういうアジア研究領域の拡大の過程で、アジア研究者は単にアジア侵略のあとを追って研究領域をひろげただけではなく、侵略勢力と結びついて研究を進めた。その代表的なものは満鉄調査部である。大陸の現実問題の調査では満鉄調査部が最も多くの成果を示したが、満鉄はいうまでもなく大陸侵略の

第一線で活躍した国策会社であり、その調査活動は満鉄の重要な社業の一部であった。

注目すべきことに、日本における東洋史学の形成は満鉄と深い関連があった。満鉄は日露戦争の直後に大陸経営の任務をになって設立されたが、当時、東洋史学の開拓に精力的活動をしていた白鳥庫吉博士（当時、東大教授）は、満鉄総裁の後藤新平を説得して満鉄東京支社の内部に満洲・朝鮮の歴史・地理の調査室を設けさせた（1908 年）。これは東洋史学の形成に重大な意味をもつ記憶すべきことがらであるが、博士はこの研究事業をおこす目的・抱負について、つぎのように述べている。

露西亜戦役の局面取りで南満洲の経済的経営が我が国民によって着手せられ、朝鮮に対する保護と開発との任務がまた我が頭上に落下し来りし時、余は学術上より満韓地方に対する根本的研究をなすの急務なるを唱説したりき。其の意蓋し二あり。一は満韓経営に関する実際的必要よりするものにして、他は純然たる学術的見地よりするものなり。現代における諸般の事業が確実なる学術的基礎の上に立つべきものなるは言ふを俟たずして、満韓の経営また固より然らざるを得ず（「満洲歴史地理」の序文のなかの一節）。

白鳥博士は満韓経営に即応し、それに学術的基礎を与えるために、この研究事業を始めたのである。日本の大陸発展を肯定・支持し、学術の面からそれに貢献することを目ざしている。

この満鉄における研究事業には、白鳥博士を統率者として、箭内互・池内宏・松井等・稲葉岩吉・津田左右吉の諸氏が参加した。これらの人々は日本における東洋史学の形成に大きな役割を演じた人々である。白鳥博士は東洋史学の開祖であり、1942 年に死去するまで終始東京の東洋史学界で指導的地位を占めた大御所であった。箭内・池内両博士は、白鳥博士のあとをうけて東大の東洋史学の正統をついだ。松井氏は後に東大の学派をはなれ、近世史の研究で活動した。稲葉博士は朝鮮史・満洲史・清朝史の研究で多くの業績を残した。津田博士については今更いうまでもないであろう。これらの東洋史学界の重鎮となるべき人々が、この満鉄の調査室で養成されたのである。

これらの人材の養成とならんで、研究成果が注目される。この調査室の成果は、「満洲歴史地理」2冊、「朝鮮歴史地理」2冊、「文禄慶長の役」1冊として1913年に刊行された。そのうち調査事業が東京大学に移管され、満鉄の資金援助で「満鮮地理歴史研究報告」16冊1915～1940年が刊行された。そのうち「満洲歴史地理」は全文がドイツ語に訳され、西洋の学界に紹介された。これら一連の研究成果は、日本の正統的な東洋史学が世界に誇るべき業績として従来は非常に高く評価されていた。こういうものが満鉄との深いつながりのなかでつくられた¹⁾。

東大を中心とする満洲・朝鮮研究は代表的事例であるが、このほかにも同様のものが沢山ある。日本人の手によるアジア研究の代表作の一つである「台湾私法」と「清国行政法」とは、日本の台湾統治の直接の産物である。朝鮮に関する多量な研究・調査が朝鮮総督府の力で行なわれたことはいまでもない。アジア各地の考古学上の発掘は、各地の支配機関・軍部の援助によって実現された。とくに戦争中のアジア研究は殆んど全面的に軍部・興亜院・国策会社などの指揮・援助の下で行なわれた。東大の東洋文化研究所および京大の人文科学研究所の前身であった東方文化学院は、外務省対支文化事業部の基金で設立運営されたが、その基金は団匪賠償金を積立てたものであった。こういう事例は、さがせばいくらでも出てくる。

敗戦にいたるまでの日本のアジア研究は、こういう体制のなかで行われた。こういう体制によって生れた成果を除いたら、一体どれだけのものが残るであろうか。またアジア研究者のうちに、こういう体制と無関係であったものがどれだけいたであろうか。程度の差はあり、また研究の志向にちがいはあったが、アジア研究の大部分がこういう体制のなかで行なわれた。私自身もそうであった。満洲国の成立、中国との全面的戦争など、日本のアジア侵略に対応して、研究所や研究事業がつきつきにおこったが、私の朝鮮・満洲・中国に関する研究はそういう体制のなかで行なわれた。それを離れては研究者としての私は存在しなかった。

現在の時点では、こういう体制に対して、またそういう体制のなかで研究したことに対して、批判が

あり反省が求められつつある。これは当然のことである。しかし敗戦前においては、そういう声はきかれなかった。戦争を鼓吹し、軍部の宣伝をするようなものに対しては学界の反感があったが、そうでない限り研究に従事すること自体については何の批判もおこらなかった。保守的立場のものからは勿論、内心アジアの解放を願うものからの批判もおこらなかった。そういう人々まで、侵略体的〔ママ〕研究体制のなかに身をおいていた。したがって研究者自身も、そういう体制のなかで研究することに矛盾や抵抗をたいして感じなかった。私自身いま当時をふりかえてみて、いろいろの思想的悩みをもちながらも、そういう体制のなかにいること自体については苦痛をさほど感じなかった、というほかはない。被害者意識がたよく加害者意識が乏しかった訳である。満鉄調査部にはいったときには、一種の解放感を味わい、未知のものを探求する希望に胸をおどらせた。侵略機関に身をおくという罪悪感もたなかった。その点は戦後に批判されて参ったのであるが、正直のところ上記のような状態であった。

フォード・アジア両財団の金をもらって中国を研究することと、かつて日本のアジア研究者が侵略勢力と結びついて研究したこととのあいだには、相異点と同時に共通点がある。外国からの援助をうけるのは昔になかった新しい事態である。しかし大きな政治目的をもつものから援助をうける点は共通である。注目すべきは、援助のうけいれに対する学界の反応である。かつては外部から援助をうけることについては何の反対もなかった。大先生になると、政界・財界などから金をひきだし、弟子に仕事を与えるのが大きな役目であった。その金の出所は問われなかった。いまアメリカの財団の金をもらうことの当否がこれだけ大問題になっているが、昔ならば外部からどれだけ金をもらっても問題にならなかったであろう。まことに隔世の感がする。しかし反対の声が大きいからといって、賛成者が少ないと考えるのは禁物である。アジア研究の伝統的あり方からいうと、外部から援助をうけるのは当たり前であり、そういう伝統についての反省はまだ十分に行なわれていないからである。その伝統の点にまで立ちいらないと、賛成なり反対なりが十分に徹底しないと思う。

II アジア研究の性格

1 思想と学問との関係

日本におけるアジア研究は侵略に結びついた研究体制のなかで成長した。しかし、このことは直ちに日本におけるアジア研究の内容が侵略的であり、侵略に奉仕した、ということにはならない。かつての研究のなかには、学術的価値が高く、現在・将来において学問の発展に役立つものが少なくない。アジア研究の体制と研究の内容とのあいだには、相当に大きいずれがあった。戦後、日本のアジア侵略については批判が行なわれながら、それと結びついていた研究内容についての批判が乏しいのは、当時の研究者がそのまま残っているという事情も関係するかと思うが、主たる理由は、その研究自体のなかに侵略的性格のものが少なく、むしろ学術的性格のものが多かったからだと思う。これは、どういう力と結びついても、研究者自身の努力によって、研究の純粹性を守りうる、という考えを生み出す有力な根拠であると思う。実はここに問題がある。

侵略体制のなかにながら侵略とは縁のうすい研究をなしとげたことについては、種々の理由が考えられる。日本の侵略が恣意的・冒険的であった、合理的計画をもたず、したがって侵略を支える研究をさほど必要とせず、研究を一種の飾り物とみなしたことも、一つの理由であったと思う。また研究者の側において、現実から逃避して研究に沈潜したものがいたことも、一つの理由であったと思う。戦争中には、そうせざるをえない事情があった。しかし何より大きな理由は、学問を現実からひきはなし、現実にかかわりのない態度で現実に関係のないことを研究するのが正しい研究である、という考えが、学界を支配していたことである。現実とはなれて学問それ自体のために研究するするという態度である。それが東洋史家の伝統的態度であった。

かつて明治末年に、白鳥庫吉博士は満鉄を説得して地理歴史調査室をつくり、満韓経営に貢献するという名目で学術的研究を始めた。ところが、この研究事業は博士の意気ごみにもかかわらず、まもなく中止された。事業開始ののち数年たって調査成果が出版されると、満鉄の首脳部は調査内容があまりに

も現実ばなれがしているのに驚き、とても満鉄の経営には役に立たんと考え、調査事業を打ちきった(1914年)。ただ従来のかえりみ、その後も出版費の援助だけをつづけた(これ以後研究成果は東大文学部の事業として刊行された)。白鳥博士は学術研究を通じて日本の大陸発展に貢献しようとしたが、それは大陸経営を担当する満鉄には使えなかった。元来、博士が考えていた研究は、すぐに役に立つ研究ではなく、いつかわからぬ遠い将来になって役に立つものであったらしい²⁾。いいかえると実際には役にたたんものであった。いまわれわれが見ても、この研究は満韓経営に役立ちそうには思えない。それを博士は学術的研究と考えたのである。この研究の内容は、主として地名や年代の非常に綿密な考証である。そこには民衆や社会の悩みは全くない。精巧な研究ではあるが、現実とは縁の遠いものである。

注意すべきことに、このような研究が、敗戦前においては、日本の東洋史学が世界に誇るべき業績として尊重されていたことである。人間不在の実証的研究を正しい歴史学とみとところに、従来の東洋史学の大きな特色があった³⁾。その考えは今でもなくなっていない。

こういう研究からは、侵略を積極的に支えるものはでてこない。また侵略に反対するものもでてこない。そういうこととは無関係に、現実ばなれのしたことを研究するのが正しい研究であると考えられた。そこには学問の純粹性・主体性が保持されているように見える。現実の問題からはなれることによって、東洋史学の純粹性・主体性が守られたように見える。

現実をはなれることは、つきつめていくと学問から思想を除去することである。たとえ現在と縁の遠い古代の研究であっても、現代に生きる研究者の思想を媒介にして、その研究は現実とつながりをもってくる。現実とはなれるためには、単に現代の問題をさけて古いことを扱うだけでなく、研究のなかから思想を捨てざる必要がある。それは実際には不可能であるが、それを正しいものと考え、そのために努力することは可能である。日本の東洋史学の大きな特色の一つは思想に乏しいことであるが、それが東洋史学の純粹性を守る道と考えられていた。

私が大きな教えをうけた池内宏博士の研究は、こういう立場の一つの代表的事例である。博士の研究は一種の論理学ともいべきものであって、論理的合理性が研究の基準であった。極端ない方をすると、論理にあうものが真実であり、たとえ史料はなくても、論理的に証明された仮説は実在である。逆に史料にあっても、論理にあわぬものは、史料の誤りであって実在しない。この研究方法には示唆にとむものを多分に含んでいるが、博士はこういう立場から研究者の思想・感情を排して、専ら論理を追求した。これによって朝鮮・満洲の古伝説・古文献の批判に幾多の輝しい成果が生れたが、博士の研究では思想や人間感情をぬきにした抽象的世界が探求された。[次号につづく、『歴史学研究』No.270、1962-11、pp.28-35]

- 1) 満鉄における地理歴史調査室の設置とその成果については、津田左右吉「白鳥博士小伝」(東洋学報 29 の 3・4)・和田清「満洲蒙古史」(歴史教育 7 の 9「明治以後における歴史学の発達」)などに記されている。なお、この調査室には、朝鮮本が多量に集められた。いわゆる「白山黒水文庫」である。それは後に東大に移管されたが、関東大震災で大部分が焼失した。その朝鮮本の蒐集については、朝鮮総督府寺内正毅との交渉があった。調査室の設立はもとより、文献蒐集についても、白鳥博士の政治的手腕が発揮された。
- 2) 石田幹之助「白鳥史学」(歴史教育研究 8、座談会)。
- 3) 考証史学に対して批判がなかった訳ではない。松井等氏は、矢野仁一氏とともに、ただ過去のことを考証・註釈するのは歴史ではない、といて、東洋史学界に真の史学研究がないことを批判している(「歴史教育 7 の 9「明治以後における歴史学の発達」 501 頁)。その松井氏は、かつて白鳥門下で満蒙史を研究していたが、のちに正統派からしめだされ、学界では孤立の状態であった。それで彼の批判は有力ではなかった。

[(19)ページからのつづき]

わらについて介護し、成都の反右派被害者や秋雨教会の友人たちが見舞いに来ているのが、張さんにとって励ましと慰めになっています。

張さんは残された時間が多くないことを悟り、『格拉古軼事』の電子版を作り、興味のある人に推薦することに同意してくれました。私たちは、彼の友人・同行の士として、この畢生の苦難と心血を濯いで成った不朽の作を広く推薦したいと思います。

これは、人生の苦難と血と涙で書かれた書物であり、中国の収容所列島の生存者でありながら、中国の地では未だに世間に問うことのできない書物です。縁あってこの書物にめぐりあった読者の一人一人が、深く崇敬と感謝の念を抱き、運命を前にしてなお頑強不屈でありえる老人に対して愛と関心を表わすよう期待します。

本を書くのはたいへんなことです。ましてこのような、

深い淵をのぞきこみ、苦難を凝視して、犠牲者の魂を鎮めるような本を書くのはもっとたいへんなことです。しかも書くことを前提に、あの時代の怒濤の中を生き抜いてきたのもたいへんなことです。私たちが期待するのは、張さんが残りの年月において、読者と精神的な出会いや交流をはたし、人の世にまだ暖かみ、そして情義があることを感じてもらうことです。私たちはお年寄りのために募金しているわけではなく、読者にこう呼びかけたいのです。あなたは、いま在世の老作家を支持する機会を有しており、あなたの賞讃こそがインディペンデント作家の尊厳と自由を維持している価値なのだ。

主推薦者：胡傑、呉茂華、冉雲飛、艾曉明、王荔蕪、譚作人
推薦協力者：羅小剛、盧剛、張國慶、劉書貴、唐詩林、王慶華
受取人：楊文婷女史

☆

[(6)ページからのつづき]

2003 年、短編小説集『雲の上の日々』を中国で発表、発禁。

2005 年、小説『Tijdloos, over een verre rivier (遙かなる河には始まりも終わりもない)』を出版。

2008 年、小説『China Noir』(オランダ語?)を出版、政治サスペンス(ペンネーム、ジュリー・オーエンを使う)。この頃から映画の脚本やパフォーマンス・アートを始める。創作活動をオランダ国内に限るのではなく、また文字作品だけに限るべきでないと考

え、映像芸術に力を入れている。

2011 年、長編小説『Butterfly』(英語)。

2014 年に自作を映画化。ハーグの雑誌『XiN Magazine』編集長を務める。

以上の作家は、それぞれのタイプの一例であるが、中国の亡命者文学としてもっと知られてしかるべきであるし、中国文学の新たな可能性を備えているとも言えるだろう。

☆